

(四) 俗謠に現はれたる兒童

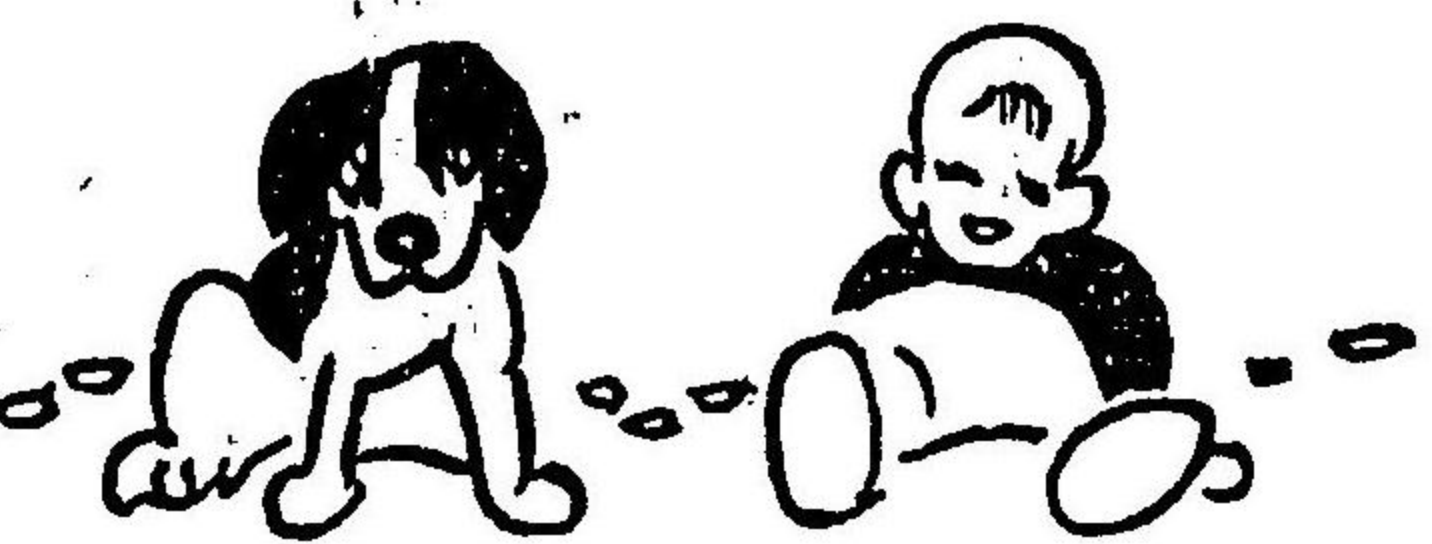


兒童研究の歴史文學的研究の一方法として、各時代の童謡も亦開却す可からざる研究資料なり、されど今尙里俗の間にのこれる童謡は、其の子守唄たる、遊戯歌たる、手鞠歌たるを問はず、概ね千篇一律にして所謂工を同ふして曲を異にするものなり、子守唄の「でんく大鼓」、遊戯歌の「開いたく」手鞠歌の「千松は何處に」の如き其類なり、されば茲に着想に一樣なるは其一例を掲げて全斑を推知せしめむ事を期し一々これを掲げず

且つ此に編する所の俗謠の中には、往年予が知れる全國各地の教育家を煩はして、其の地方に於ける俗謠を収集し、皆て之を雑誌「兒童研究」に掲載したるものも尠からざれば、皆の地方別は其の報告を標準としたるもの多し、されど俗謠の多き、或は關東地方に行はるものにして、九州地方に行はるものもあらむ、讀者幸に之を諒焉

俗謠 (子守歌)

武藏國東京地方



ねんくころくころくよオ おころりこやまの  
雉子の子は泣くとお鷹に捕られます、黙まつてねんく  
ねんくよ、ねんねのお守はどこに往つた、お山を越えて  
里往つた、お里の土産になに貰うたでんく太鼓に笙の  
笛おきやがり小法師に振鼓叩いて聞かすにねんねしな。

同



寝んくよ、ころくよ、ねんく小山の小鬼はなせに  
お耳がお長いね、お母さんのお胎に居た時に、椎の實壹の  
實を食べて、そオれでお耳がお長いよ。

四 俗謠に現はれたる兒童



寝んくよころくよねんく小山の兎はなアせにお耳がお長いねお母さんのお胎にゐた時に納豆を喰へてそオれでお耳がお長いよ。

同

寝んくよおころりよおころりお山の兎はなせにお耳が長ござるお母さんのお腹にゐた時は枇杷の實笹の實喰へましてそれでお耳が長ござる。

同

千疊座敷の唐紙育ち坊様も善い子になる時は地面を殖やして倉建て、倉の隣に松植ゑて、松の隣に竹植ゑて竹の隣に梅植ゑて、梅の小枝に鈴下げて、其鈴ちやらく鳴る時は坊様もさぞ嬉しかろう。



武藏國青梅地方

ねんねこくねんねこよおらが赤坊はいつ出来た三月櫻の咲く時に道理でお顔が櫻色。

常陸國土浦地方

ねんねやかんくねんねこしなねんねこしてお目が覺めたなら赤い御膳へ魚添へて寝ずば昨夜の冷ばくへ冷汁かけて上げまんすそれなら駄まつてねんねしな。

上總國小濱地方

ねんくこ坊つちやん神の子坊つちやんお月におばつば。

美濃高須地方

守や子守や子を啼かするな啼かせまいぞの守ぢやも



ねんねころ市今日は二十五日明日は此子の宮参り、宮へ参つたら何といふて参ろ、一生此子の健全なよに。

同國岐阜地方

ねんねやアころくやアねんねの守は何處往つたあ  
の山越えて里往つた里の土産になに貰うたでんでん太鼓  
に笙の笛、それを貰うてなんにする、なんにするかの富士  
の山、富士の山ほど育つが好い、ねんくころくねんね  
せう。

ねんねやあ、ころくや、ねんくの守は何處往つた、あ  
の山越えて里往つた、里の土産に何貰うた、でんく大鼓  
に笙の笛、それでも欲しけりや上げませう、ねんねの生れ



た其日には、赤い飯に魚添へて、父様のお箸で上げましよ  
か、父様のお箸はとくさい、母様のお箸で上げましよか、  
母様のお箸はちくさい、姉様のお箸で上げませう、ねん  
くころくねんねせう。

信濃國上諏訪地方

ねんくよころくよねんく小山の雉子の子は何  
に成るとてほろうつ、犬になるとてほろうつ、犬にな  
るまい、箆になる、箆にはなるまい、笠になる、笠には何處笠  
越後笠、越後の祭に出したれば、一貫五百と價がついた、一  
貫五百に賣らうより、置いて子守女にさませせう

ねんくよころくよねんく小山の雉子の子は、山  
で木の敷萱の敷、七里が濱では砂の敷、天に譬へて星の敷





世界に譬へて人の數、鳴くとお鷹に捕られるよ、黙つておねんねころくよ。

同國西條村地方

斯様も泣かれちや子守子も辛い、偶にやお内儀さん膝で泣け

雨は降る、乾物ア濡れる、お飯ア焦びつお寺の鐘が鳴る

ねんねしなさい寝る子は可愛い、起きて泣く子は面悪

駿河國静岡地方

好い子ださん子だ健全の子だ健全に育たお子ぢやもの寝るとねり餅呉れてやる、泣止ると團子を呉れてやる。



泣くと長持背負はせるぞ、怒ると癩虫呉れてやる。  
坊やよい子じや、寝んねしな、此兒の可愛さ限りない、山には木の數草の數、沼津に居れば千本松、千本松原、小松原、松の葉よりも尙可愛い。

山城國

寝たら丹波や起きたら山へ、お目がさめたら、お江戸まで

京都附近

大黒さんと言ふ人は、一に俵を踏まへて二に莞爾笑つて三に盃さしようて、四つ世の中よいやうに、五ついつものごうとくじ六つ無病息災に、七つ何事ないやうに、八つ屋敷をとりひろめ、九つ小倉をたてなれば、十でとつくり







兒童を誦へる文學  
をさまつた。

大阪

ねんねころいイち、天満の市よ、大根揃へて舟にイ積む  
舟に積んだアら、何處までエ行きやる、木津や難波の橋の  
オ下橋の下にはお龜が居やアる、をかめとりたアや竹欲  
しや、竹が欲しけりエや、竹屋へ行きやアレ、竹はなんでエ  
もござりイますウ

ねんねころりこ天満の市よ、大根揃へて船に積む船に  
積んだら何處まで行きやる、木津や難波の橋の下、橋の下  
にはかめがおじやる、かめ取りたや竹欲しや

伊勢國三重郡地方

守や子守よ何故子を泣かす、西も東も知らぬもの





あの子好い子ぢやぼた餅顔で、きなこつけたら猶よか  
ろ、きなこつけるは昔の事よ、今は世が世で砂糖つける。  
守といふもの淺ましものよ、道や街道で日を暮らす。  
おしゆに叱られ子に責められて、何處で立つ餓鬼アは  
泣く餓鬼奴は泣かは承知では泣け、内の戸間口へ聞ける  
様に。

同國倭村地方

お月様幾歳、十三七つ、そりやまた若いな、赤坊子生んで  
白い坊子生んでおこよに掩負せて、油買ひに遣つたらば、  
油はこぼす雪駄は失くす、狎と猿買つて來た。

越前敦賀郡地方

内の此子の枕の模様梅に鶯松に鶴梅に馴れても櫻は



いや、同じ花でも散り易い。

内の此子は今眠る境、誰もやかましいうて呉れな、たれもやかまし言ひはせんけれど、守がやかまし言うて起す、お前何する行燈の下で、かわい此子の帯締けて、あした赤いべに帯さして、好きな宮さんへ連れて行こ、わたしは濱の鱒賣、潮風に吹かれておいどが真黒け、アンドンく〜コンドンく〜

越後國地方

ねんねしなさいまだ夜は明けぬ、明けりやとやらわしが身は。

御母様あれ見よ、飴屋が通る、太鼓たゝいて桶乗せて

伊勢北部地方



よいよ〜と寝るよな子なら、守も樂なし子も樂な、よ  
いよねんね。

よいよ〜とよその子はよう眠る、内の旦那の子は眠  
やぬ、よいよねんね。

こんな泣く子の守しよといはれ、泣かん子の守しよと  
いうたに、よいよねんね。

こんな泣く子のえう、守せんに、お暇お呉れよ私や歸る、  
よいよねんね。

お暇やるけどなんというて歸る、お子が死んだという  
て歸るか、よいよねんね。

相模國

ねん〜ねん〜ねん〜よう、おば〜何處行く手に



花下げて、嫁の在處へ孫抱きに、何を土産に致さうぞ、びい  
くにでんく笙の笛、おきやがれこぼしに犬はりこ、吹  
きてたゞいてお目に懸きよ、ねんくねんくねんく  
よう。

備後國三原地方

ねんくねんや、ねんく子守は、どオこいた、あアれば  
まちイちやア買ひに、早う戻ろと思つたら、あアめが降つ  
てエ江べつてエ、何處を通過もどらうか、こゝ通過戻らう  
か、あすこを通過戻らうか、ねんくねんや。

周防國

わたしや歸ります、後に守を置きやれ、遣ひくらべて名  
をたちやれ



おりがとゝさん何處へ往た、長野長崎金堀に金堀らす  
に、あと見れば、あとにや時雨の雨が降る。

前にや牡丹の花が散る、お守に來いと、の狀が來た、お守  
はいやく頭ふる、しやちむり來いと、の狀が來た。

あとうさんなんぼ十三九つ、そりやまだ若いよ、若いこ  
とわ道理、紅かによつけて、笹色の帯を背にしやと結んで  
お宮へ參るお宮の門で、赤さんひろてこりやだれ抱かし  
よ、お萬に抱かしよ、お萬が部屋は、金の屏風に切戸の枕で、  
寝さしませよ。

紀伊國

ねんね根來の御城の簀でよウ、としよりこいよの鳩が  
鳴くよウ。





讚 岐 國

うちの裏には茗荷とふさと、茗荷は目出たアふきはんじやう。

ねエンくくよ、ねんねした子に羽子板と羽根と、ねんねせん子に羽根ばかり。

昔千年屋島のいくさ、今に御座んす繪に書いて、親のない子に髪結うてやれば、親が喜ぶ極樂で、

土 佐 國

殿様いとしに限りない、天に譬へば星の數、山では木の數、萱の數、七反畑の芥子の數、七里が濱の砂の數、召したる御服の糸の數、おねんねくくや

朝はとうからお晝なれ、お乳の出ばなを上げましよぞ、



お乳の出ばながおいやなら、鯛の濱焼雁の汁、ねえエンくくや。

筑 前 國

ねんねくくねんねこよ、ねんねが守は何處へいく、あの山越えて里い行く、椎の山通れば椎がばらりくよ、栗の山通れば栗がばらりくよ、から栗一つ拾うて、から栗かんと噛みわつた、片つらは虫くらひ、虫くらひは誰さんに(他の名)よかかたは何さんに(其子を)それ持つてねんねしなさい、ねんねくくよ。

豊 前 國

月さんなんぼ、十三七つ、そりやまだ若いな、若い時に子を産んで、誰に抱かしよ、お萬に抱かしよ、お萬は何所にい





た、油買ひに酢買ひに、油屋の戸口で、油一升こぼした、其油  
どうした、犬がねぶつて仕舞うた、其犬は何うした、太鼓に  
張つてしまふた、彼方の山でどん／＼此方の山でどんど  
ん



俗 語 其二三遊戯ものに  
關するもの

伊 賀 國

鳥島かきしまどんがらす、後の鳥先かきまになれ、わが家が焼けるぞ早  
行つて水かけよ、杓しやくが無ければ貸してやる。

子買こかひふ／＼、子こに何食なにはす、砂糖饅頭さとうまんどうそりや虫むしの毒どくよ、茶  
漬ぢけにこの物の物ものそりや咽のどが乾かわく、赤あかの飯いにととの菜さいそりや  
骨ほねが刺ささる、むしつて食たはそ、小骨こほねが刺ささる、しがんで食たは  
そ、それはよかる、どこ／＼ねさそ、二階にがいの隅すみで、ちゆつ／＼  
が引ひくは、金爛かねらん緞子じゆんす着きせてねかそ、それはよかる、早はやはり籠かご  
に入れて嫁よめ入いさそ、チ、／＼カ、カア。

子供衆こどもら／＼、何花なにはな折おりに、脚あし踏ふ花はな折おりに、一本いっぴん折おりては腰こし

國、俗語に現はれたる兒童





にさし、二本折りては笠にさし、三本目に日が暮れて上の  
 庄屋でとまろか、下のしやう屋でとまろか、上のしやう屋  
 でとまつてあかつき起きて空見れば、.....  
 .....  
 からすどんく己の口は眞黒け、からすが牛見て笑ふた  
 げな。

伊勢國

正月はよいもんぢや、あツかい衣服着て、羽根突いて下  
 駄の齒のやうな餅たべて。

お月さん幾歳十三七つ、まだ年は若い、なゝおりさせて  
 おんどきよへのぼしよ、おんどきよの途で、尾の無い鳥と、  
 尾のある鳥と、けいつちいやあらしいよううと鳴たとさ、



私のお母さん名古屋で御座る、行けば能う来た上がれ  
 と仰しやる。上がりやお茶飲めお煙草上がれ、それがいや  
 なら裏へ出て見やれ、菊や牡丹や萬年青の花や、なせ泣か  
 しやす、腹が痛いか夏やみするか、はらもいたない夏やみ  
 もせぬ腹に七月や、子が出来て、もしも知らんと男の子  
 なら、寺へ預けて手習させて、白い手拭鉢巻させて、赤い手  
 拭首巻させて、寺の椽からつき落されて、一分二分する紙  
 入れ落し、誰がひろたか尋ねて見れば、次郎平八郎平の子  
 が拾つた。

尾張國

開いたく何の花が開いた牡丹の花が開いた、開いた  
 と思つたら又萎んだ、萎んだ萎んだ何の花が萎んだ、蓮華





の花が萎んだ、萎んだと思つたら又開いた。

田螺殿々々々お彼岸参りさすせぬかお彼岸参り爲う  
と思つたら鳥といふ黒鳥が脚を突き屬つゝき、それで  
う参らなむ。

東京

夕焼け、こうやけ、あした天気になあれ、

笠来い、山見て来い、行燈の光をちよつと見て来い。

兎、うさぎ、何を見てはねる、十五夜のお月さま見てはね  
る、ヒヨイ、ヒヨイ、

まいまいつぶろ、お湯屋の前に、喧嘩があるから、角出せ  
槍出せ。

お月様何歳、十三七つ、まだ年や若いね、あの子を生むで、



この子を生んで誰に抱かしよ、おまんにだかしよ、おまん  
何處往だ、油買ひに茶買ひに、油屋の縁で氷が張つて滑つ  
て轉倒んで油一升零した、其の油何うした、次郎殿の犬と  
太郎どんの犬と、みな替めて仕舞つた、其の犬何うした  
太鼓に張つて、あちら向いちやどんくく、こちら向い  
ちやどんくく。

辨慶が五條の橋に出向へば、向へほりそり柳きごオ、白  
き衣をば鎌に掛け、汝は誰ぢやと問ふたれば、吾こそ源牛  
若丸、さてこそ曲物ござんなれ、薙刀小脇に搦ひ込むで、ち  
よいと突きやちよいと飛ぶ、おちよちよのちよいと突き  
や、おびよびよのびよいと飛ぶ、オヨンがヨイヤサヨイヤ  
ヨイヤ。





ちんかんちんから鍛冶屋の子、裸體で飛び出す風呂屋の子。

森の間からお寺が見える、お寺寂しや小僧一人

信濃國

月さん幾歳、十三七つ、まだ年若いな茨の蔭で赤ん坊生んで誰に抱かしよ、おちよばに抱かせて、油買ひ遣つたれば油屋の前で、すべつて轉んで赤い衣服汚して、洗屋で洗つて絞屋で絞つて、干屋で干して、のし屋でのして、疊屋で疊んで、てんてん手箱へ詰め込むだ詰め込むだ。

つぶ、つぶ、山へ行け、おりや、いやだ、われ行れ、去年の春も行つたれば、鴉と申す黒鳥が、あつちへつゝき、つんまわし



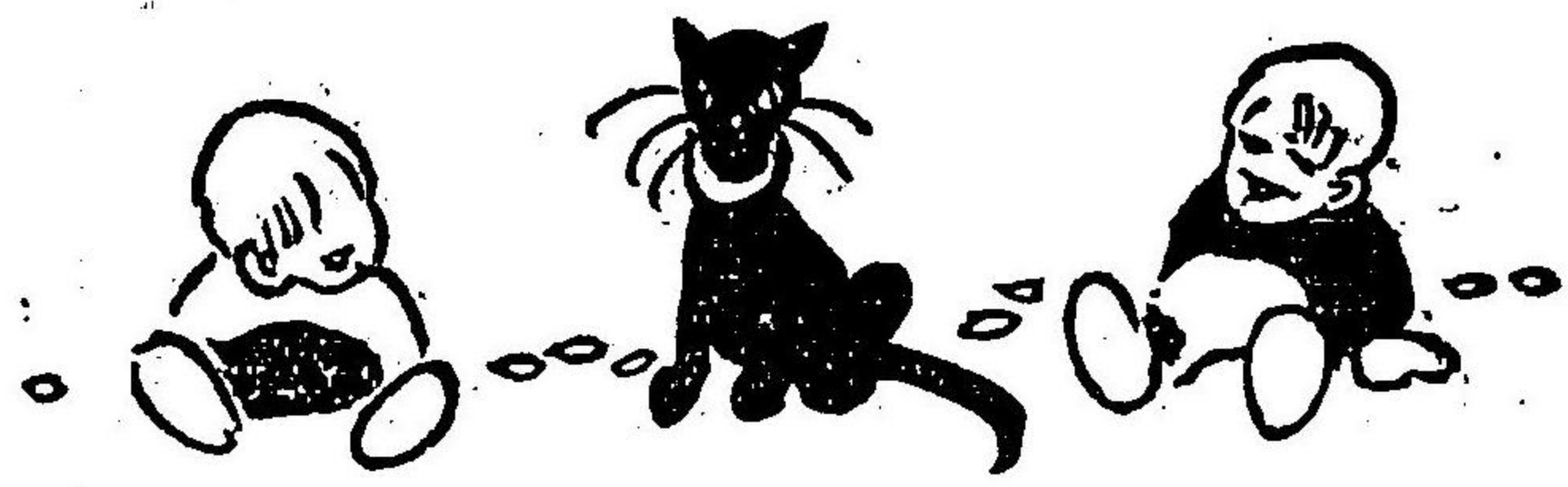
こつちへつゝき、つんまわし、二度と行くまい、あの山へ。芋虫ごろ／＼あとの／＼仙次郎、昨夜の鳥には何呉れた、かい餅かいて呉れました、それはよくした先に立て。ちう／＼鼠の棚探し、猫に逐はれて、耻掻いた、つんとこつんとこ、つんぬけたんまいた。

かごめ／＼籠の中の鱒は、何時々々出やる、十日の晩に鶴龜ひきこめ／＼し中、手人を入れて、籠の如く、手か手つかいな、すんと持ち込め、聊かないが、赤ね紐で、萌黄の蚊帳釣うて、オット立派なさあ来て、呉んなせ、おせんさ待つて、呉れ、ちよこやつた、締め込んだ、二人向ひ合

隠れちよ、カ、河原の鱒は川へおんで、小豆か豆から







兒童を睡へる文學

よくりちよつとひんなめたんまひた隠す時れ呷んほ  
 釜來い乳ち呉れる、山吹來い宿どかせる自分うがてんでの箒  
 で來い、粥餅三杯かいてくれる隠す時れ呷んほ  
 向むかふの山を猿が三匹通る、先の猿は物識らず、後の猿も  
 物識らず、一番中の小猿こざるが能く物識つて、あの山崩おちして堂  
 建つて、堂のぐるりに花蒔いて、花は何花牡丹芍薬梅の花、  
 子供衆花折りに行くまいか、一本折つちやア手に持ち、二  
 本折つちやア腰に差し、三本目に日が暮れて、處の宿へ泊  
 らうか、鳥の宿へ泊らうか、處の宿へ泊つたれば、曉起きて  
 見たれば稚子の様な女郎衆が、黄金の盃手に持つて、黄金  
 の雪駄を穿き詰めて、一杯參れ百取る、二杯まぬれ二百取  
 る、三杯目には肴が無いとて上がらんが己おれが邊あたの肴さかなは白





瓜赤瓜いつしやうがはらのあいのすしあいのすし。

陸奥國

友達なく花折るに行かぬか何花折りに牡丹芍薬芥子の花折るに一本折りて手に持ち二本折て腰に差し三本目に日暮れて何處へ宿取るべな己方の山は高い處に筈低い處に落の子鉄に鑷に澤山だ

劍路國

鳥ぞんく何處に行くね柳の下へ胡麻蒔きに何升何合蒔いて來た三升三合蒔いて來た誰に呉れると蒔いて來たお前さんに呉れると蒔いて來たお前さんが十四に成つたならおはぐる着けて紅着けて京の濱まで送らせ



子を買はう／＼子を買うて何すりや、御坊のおしろで  
 熱さま、鯛のとくお骨がたつよ、みしつてくはそ、みしり  
 ひしわくよ、どの子をはしよ、誰子ほしよ、なんでいこ／＼  
 に籠に乗てお出で、籠はいやよ、ちんばてお出で、さあいこ。

土佐國

雨、雨、降りやめい、お寺の前の柿の木の下で、雉子の子が  
 啼くぞ。

雪やこんこ、霰やこんこ、お寺の柿の木降りやとまれ／＼  
 や。

螢こい水飲ましよ、あちの水苦いぞ、こちの水／＼の汁  
 甘いぞ。



向ふの山で木をきるは、はいとのかじやうどのか、きり  
 にきつて舞まうて、中わつて見たら、二つになるはこと、三  
 つになるはこと、はだか出て来て、寺入せうとおつしや  
 る、寺からおりて、袴着ようとおつしやる、袴の腰に、何々つ  
 けうぞ、梅の木に柿の木、さらば菊の花、花の上に何々とま  
 る鳥もとまる、鷺もとまる、鳥殿の首はねぢやかつたくび  
 で、長老に見せたら、ちやうらうはかちで、殿様お馬槌の子  
 は、鎧持よう鎧よう持ったこと。

肥前國

向ふへ隠れ子は何人御座る、十三人も御座る、何所で代  
 りませう、鬼線香屋の前で、皆來たらうが代りませう。  
 草履かん隠しかん、かたらんものは、いしや／＼、籠の子





べんつけく揃うた。

出雲國

やれ腹が立つ、立つならば、硯と筆とを手に持つて、思ふことをば書き置いて、紫川へ身を投げた。下から雑魚がつくくやら、上から鴉がつくくやら、つゝいた鴉は何處へ行た森木の下へ麥蒔に、何石何石蒔いて來た、二千石蒔いて來た、二千石の能には、寺の前で子を産むだ、住持の衣へ血がついて、雨垂水で洗つて、香爐の火で炙つて、香爐の火が足りないで、油火で炙つて、油火が足りないで、竈の火で炙つて、竈の火が足りないで、炬燵の火で炙つた。

雪やこんこや、霰やこんこ、お前の脊戸で團子も煮える、小豆も煮える、山人は戻る、赤子はほへる、杓子は見えず、や



れいぞがしや。

底とび舞ふて見せ、あしたの晩に、鴉にかくして鼠遣る。向ふの山のかはづが啼くが、なして啼くか、寒うて啼くか、びもじて啼くか、びもじきや、田つくれ、田つくりや、さたない、きたなきや、洗へ、洗やつめたい、つめたきや、暖れ、あたりや、熱い、あつきや、退れ、しざりや、蚤が食ふ、蚤が食や、殺せ、殺しや、可愛い、可愛いきや、抱いて寝、抱いて寝りや、蚤が喰ふ、蚤が食や、殺せ。

陸奥國

橋の下に六地藏、鼠に頭を噛られて、鼠こそ地藏だ！鼠地藏だら、何しに猫に捕らべな？、猫こそ地藏よ！、猫は地藏だら、何しに犬に捕られべな？、犬こそ地藏よ！、犬は地





藏だら、何しに狼に捕られべな？、狼こそ地藏よ！、狼地藏  
だら、何しに火にまかれべな？、火こそ地藏よ！、火は地藏  
だら、何しに水に消されべな？、水こそ地藏よ！、水は地藏  
だら、何しに人に飲まれべな？、人こそ地藏よ！、人は地藏  
だら、何しに地藏拜むべな？、眞の地藏は六地藏！

伊 賀 國

天狗さん、風おくれ、風が無きや、錢を呉れ、

星さん、星さん、一つの星で出ぬもんだ、千も萬も出るも  
んだ。

周 防 國

お月さま、お月さま、もうし、もうし、猫と鼠が一升樽さげ  
て、富士の山を今越えた、雪月夜



伊 勢 國

雀はちゆうく、忠三郎、鳥はかあく、勘三郎、たぐは外山  
の鐘たつき、一日たいた米一升、粟一升。

白鷺、白鷺、なせ首が長い、ひだるて長い、ひだるきや、田打  
て、田打ちや泥がつく、泥がつきや、拂へばらや、痛い。

筑 前 國

盆来りや、嬉し、正月来りや、嬉し、嬉しの花は何處に咲く  
く、山にも咲かや、川にも咲かぬ、石山寺の門に咲く。

つくつく、ぼうさんな、なんゆう啼くか、親が無いか、子が  
無いか、親も御座る、子も御座る、おいと、し殿御を有つたれ  
ば、鷹匠にとられて、今日七日泣くかと思へば、四十九日、四  
十九日の錢金を、どうして遣うたらよからうか、高い米買





うて船に積む、廉い米買ふて船に積む、船は何處船、大阪船、大阪船こそ價がよけれ。

加賀國

昨夜見た地獄の夢を、鬼が餅搗き閻魔がらざる、我も喰たから手傳せ手傳するにも棒がない、隣へ行つて借つて來い、隣の婆婆さま御茶婆さま、かき餅焼いて其手で御釋迎の顔撫でた、御釋迎臭いとて鼻つまんだ。

石見國

亥さんの晩に、祝はぬものは、鬼生め、蛇ア生め、角の生へた子を産め

盆踊其外雜歌

親の無い子は日暮に叫ぶ、指をくはいて門に立つ(陸中)



我が子の泣くのは鈴の聲、人の子の泣くのは空のかみ

なり(借遣)

いとしかはひ子に、旅させおやよ、うゐもつらいも、旅で

知る(攝津)

幼馴染に、離れた折は、沖の櫓かいが、折れたよな(伊賀)

ふはく小川に、子が捨てゝある、拾ふて育てゝ、花が咲

く(伊賀)

柳の糸に、とめられて、歸るもならず、子がつなぐ(三河)

妻はかやかり、かまくら山へ、我れは子供に、根芹つむ(相

模)

松より巢立つ、鶴の子の、千とせは君と、親のかげ(若狭)

親は子と云ふて、尋ねもするが、親を尋ねる子は稀な(但

四 俗語に現はれたる兒童





野にも山にも子無きはおきやれ、まんのくらより子は  
資。



手鞠歌

京都

一 二のなにわら、杓子破つたら稚子の寄合、ふくく圍  
子が煮える、小豆が踊る、裏へ廻つてお月さんく今年  
のお衣服は何々ござる、裏は桃色表は鹿子、鹿子揃でちよ  
と百ついた。

一 二 三 四 よろず吉原、かや勝栗、本儀當座々々と、蜜柑山  
から谷底見れば、ほながやゆづり葉、ゆづりくのゆづり  
葉、大松に鍛はだいく、笙の笛名古屋の城は高い城で一  
段上り、二段上り、三段目の御座敷見れば、よいくよい子  
が三人御座る、一でよい子は糸屋の娘、二でよい子は人形

四、俗語に現はれたる兒童





屋の娘、三でよい子は酒屋の娘、酒屋娘は容姿かようて、京で一番大阪で二番、嵯峨で三番、御所で五番の姉様見れば、立てば芍薬座れば牡丹、歩く姿は百合の花、百合の花。

大阪

きょんく 京橋々詰の紅屋の阿母さんの染物は、立つても座つてもよう染まる、あんど車に水車、水は無いとてお江戸往て、お江戸のながさき腰掛けて、申しく小供衆さん、此處は何といふ所ぢやえ、此所は信濃の善光寺、善光寺様へ願かけて、梅と櫻をあげまして、梅はすいとて戻されて、櫻はよいとてほめられて、丁度一貫かしました、桃栗三年柿八年、柚子は九年の花盛り。

伊勢國



鶯はく 今年は船で伊勢參宮、伊勢の小枝の二の枝へ、柴かきよせて巢を組むで、十二の卵を生み揃へ、親諸共に立つ時は、黄金の桃子へ酒ついで、舞へよ大黒、露へよ夷子、中で酌とる福の神、福の神、福の神。

尾張國

私の手鞠絹糸かぐり、つけば汚れる貯へば腐る、川へ流せば柳にかゝる、柳切りたや川柳。

遠江國

ちよんく 長太郎さん、伊勢へ行くとして、伊勢の田圃で泥船引捕まへて、焼いてこがして唐辛子味喰つウけて、棚へ置いたら、鼠食ふやら、鼠食ふやら、いたち追うとして鼠追うとして、金の柱で天頭どつくり、南無阿

四番書に現れたる兒童





彌陀佛、まづ一貫お貸し申した。

駿河國

鶯や／＼たま／＼都へ上る時、梅の小枝に晝寝して、お千代に何々着せてやる。表着はこん／＼紺縮緬、下着はちん／＼ちん縮緬、それを着せてやつたれば、途中で仆ぶが手を突くが殿様が通うたらお辭儀能うせよ、お馬が來たらば傍に寄れよ、手習子供を構ふなよ、構ふと草紙で打たれるぞ、まづ／＼一本かせ申した。

甲斐國

雀殿々々、足を洗うて何處へ往た、柳の下に胡麻蒔、胡麻を何程蒔いて來た、千石萬石蒔いて來た、千石堂のお中へは釜の前で赤兒もつた、ばこの名は何とつて、八幡太郎と



申します、八幡太郎の惡戯者が、むじなの穴にて吠えられて、むちなア一疋儲け申した、手で殺すもむや／＼し、足で殺すもむや／＼し、觀音堂へ引いてツて、じづの緒で縊つて、ここの寺へ一杓子、あしこの寺へ一杓子、杓子を借りに行つたならば、こんぶしろがつて、赤い衣服、一尺、白い衣服、二尺、此子に呉れるが、あの子が恨みる誰にもやらぬ山から降るおち子に着せよ。

近江國

内のむかひのお千代、松どんは、馬から落ちて、竹のそぐひで手のひら突いて、醫者にかげよか、眼醫者にかきヨか、醫者も眼醫者も御無用でござる、あの山越えて、この山越えて、四條河原で基石を拾ろて、紙に包んで紙捻で編めて、

四 俗語に現はれたる兒童







締めた處へおしゆんとかいた、おしゆんなきまんな、五月の土産、五月土産にやなに、くもろた、一に芋二にや又たかんざし、三にさしぐし、四のめは枕、ごはん上げましよ、六はんかひみ、七さやのおびて、要らんとおしやる、いらな細帯細棒一寸一貫貸しました。

美濃國

私の手鞠絹糸かひり、つけば汚れる貯蓄けは儼る川に流せば柳にかゝる、柳切つたら川流れ川流れ。

信濃國

おん正々々正月は、松立て、竹立て、喜ぶのは子供衆嫌がるものは、お年寄、旦那の嫌は大晦日、一夜明ければ元日よ、年頭の御祝儀申します、お茶もて来い、煙草盆吸物な





んぞは早やもてこいさらばお暇仕る。二や三や四  
 よみくよしたの三本柳に雀が三疋ちヨいと止また。一  
 羽の雀は嫁入なさる。一羽の雀は嫁入なさる。一羽の雀は  
 酒買ひ行くとて鷹に追はれて、ありやほんくこりやは  
 んくちいばいちヨいと来て、ちヨいと呼んで、ちヨいと  
 隠せ。

正月門松、二月は初午、三月雛様、四月はお釋迦、五月帳六  
 月天竺、七月七夕、八月八朔、九月が菊月、十月の十日のお恵  
 比須講には、お隣近所をお呼ばれ申して、鯛の吸物、黄金の  
 御膳で蒔繪のお椀で、一杯吸ひましヨ、二杯吸ひましヨ。

箬 織 國

おらが坊子はよいお坊子、隣のおばこもよいお坊子

御膳に現はれたる兒童



木綿合羽に茶の小袖野にも山にも寝て見たが、松葉に刺されて目が覺めた、此處は何處だと思たれば、鎌倉街道の森の下森についで信濃町、信濃町から何買うた、一に香箱、二に硯、三に更紗の帯買うた、誰に呉りよとて買うて来た、おまんが死んで、今日七日、それが嘘だら行つて見ろ、見たれば杉三本、松三本、京の雀と大阪の雀と、上がつたり下がつたり百ついた。

越前國

受取つた、何々さんから受取つた、私の大事のお手鞠さんを紙に包むでこよりでしめて、しめた所へいろはとかいて、赤壁づくしか白壁づくしか、のうれんづくしか、隣近所の何々さんまで御渡し申しませう。



梅干や、赤い顔してなんちやいな、年もいかに皺寄せて、中の核まで赤成つた、赤成つた。

せんくせもとの乙娘、色は白いし目はすい、口元あたりはしほらしや、今度よめりをする時は、赤いかなこは一重ね、紫かなこも一重ね、こんな仕度をする故に、必ずく戻ろと思ふなや、朝も疾うから起きまして、四十九枚の戸を開けて、白粉べつたりべんつけて、ちやんく茶釜に茶さいて、ちいさんばあさん起きなされ、起きなされ、茶がはいた、茶がはいた。

加賀國

おれの弟は千松で、長い刀をさしたがる、長い刀をさしたくば、向いの山のほうの木、枝をおろいて葉をもいで







あとさきつばいで、長がたな、長い刀さいて何所行きや、馬かけ馬場へ馬せめに、馬のせめかもようさざる、高い所が七どころ、低いところが七と、ころ高いところから、低い所まで、ころりくとおちさんした、竹のとがり、で足ついで、さいたる刀で胸ついで、足つき薬をあげましょか、胸つき薬をあげましょか、足つき薬もいりません、胸つき薬もいりません、わしがしようごと死んだらば、向の馬場に墓たて、墓のめくらに松植えて、松の小枝に鷹すえて、もうしも鷹匠がせまつたら、千松鷹匠といふでたもれ、すつとんとん、もひとつかへしてすつとん

越後國

たんく竹の節、七は蓮花の花ざかり、とつてもこい、た



んく水せいを向ひ山の雨降りば、ナなが、喉いたか、喉がぬか、わしや知らぬ、此日の長いに向ひの奥様、が機も織らずに、日を暮らす、おいなされ、おいなされ、たしかにたしかに、皆様一ちヨもく、おかした、おかした、お一つ

美作國

でんくつくのはたれさんちや、新町ごうやのしげさんちや、今時何しにおいでたら、雪駄がかはつてかへに來た、有るものない云ふてくれ、なんだ、やれく腹立ちごう、わきや、わしが十五になつたなら、西や東に藏立て、藏のまはりに鈴さげて、鈴がちやんく鳴る時にや、ぢいさんばあさん嬉しかる、くく。

周防國

四、雪駄に現はれたる兒童



たしかにく受取りました是又大事な御手鞠様よ、蜜柑くくしてくくしてあげて、四十四まだの小糸をしめてしめたもつとへいろはと書いて、いろは戻りのはの字と書いた今日今晚誰(自分)から誰様へ(相手)御渡し申す。

長門國

一、二、三、四、山と景色をはるか眺めて、あすは祇園ほにあい上れば、はやしてんく手鞠歌、手鞠中よし四六六六、四六七ひち、四六八八、四六くらじユで、ちヨと千ついた、ちよと萬ついた。

土佐國

おんさぶこさぶ、甲浦へ飛でいた、甲浦の子供はいやし、い子供、父の錢よ盗むで、かくに銅買はして、銅の骨ヲたて



くぬいて呉れえさいや、こさいてくれえさいやこ。

越中國

桶屋の難さん、ちよこさへ嫁に、ちよこさ一番伊達衆で御座る、五兩の帯買て三兩にくけて、くけめくにより金おきて、立てば芍薬坐はれば牡丹、あゆむ姿は百合の花くスットンくと千ついたく

若狹國

内の隣のおたんや娘、眉毛福しま、目はどんぐり目で、鼻は獅子鼻、口は鰐口、齒は碁石で、耳はさくらげ、手は胡蘿蔔、脊中は俎板、腹は太鼓で、臍は饅頭で、足はこじゆので、歩く姿は蟹の横道ひ、シユツチオンチオン、パツチオンチオン百ついた。





(五) 俚諺に現はれたる兒童

俚諺は里俗に始まるものあり、或は漢籍に基くものあり、或は佛典に出づるものあり、其出處の如何を問はず、詳に之を調査すれば、國民の事物に對する思想を明にすることを得べし、されば、兒童に對する俚諺は、やがて其の國民の兒童に就きて持てる思想と見る可し、由來我が國民は樂天的にして且活動的なれば、其の兒童に對する思想も單に、愛を以て充たされたる現世的の者多けれども、佛敎の影響を受けたるものは之に反するが如し、例へば「子實」泣く子と地頭には勝たれぬの如きは前者に屬し、「子は三界の甘つかせ」親の因果が手に轉ゆの如きは後者に屬せり、又彼の「四十二のニツ子」の如きは四十二歳にして二歳の子あれば、父子の年齢を合はして四十四となり、之を略すれば四四となり、四四は死に絶すとて、之が爲に恐るしくも最愛の兒女を捨つるが如き意味なる弊ありき、今一々之等の俚諺を解説するは趣味ある研究なれども、ここには只主として之を網羅するに止めたり。



いノ部

- ◎命の三つあるもの
- ◎いと惜しき子に旅をさせよ
- ◎いと惜しき子を杖に教へよ
- ◎井のほとりに小兒を置くが如し
- ◎家貧くして孝子願はる
- ◎一字の師
- ◎一字一點を許さず
- ◎一字の恩に舌を抜け

はノ部

手紙等に現はれたる兒童







- ◎ ばい育ちは三百安い
- ◎ 馬鹿な子は猶可愛い
- ◎ 馬鹿な子を持ちや火事よりつらい
- ◎ 馬鹿な親でも親は親
- ◎ 馬鹿を見たくば親を見よ
- ◎ 針にて見ゆる子はいみぢき孝の子なり
- ◎ 二十坊主はたに牛のふぐり五十坊主に鹿の角
- ◎ 蛤は子供に虫の毒
- ◎ 鉄と丁稚は使ひやう
- ◎ 箸折屈の兄弟
- ◎ 孕女が火事を見ると子にあざが出来る
- ◎ 榮特が愚痴



にノ部

- ◎ 憎まれ子世にはばかる
- ◎ 二八あまりは人の瀬越
- ◎ 二八月思ふ子を船にのするな
- ◎ 妊娠の時兎を食へば缺唇の子を生む
- ◎ 乳母の乳あがりたるが如し
- ◎ 憎まれ子の端采

ほノ部

- ◎ ぼうすく小ぼうす豆の粉にぬりぼうす
- ◎ 法師子の稻

五、狸に現はれたる兒童



へノ部

◎滅らぬものなら金百兩死なぬものなら子一人

とノ部

◎年寄の子は影なし

◎鷹の子鷹にならず

◎鷹が鷹を生む

◎十で神童十五で才子二十過ぎては唯の人

◎とられん坊

◎鈍な子は可愛い

◎虎の子を扱ふやう



◎虎は子を思ふて千里をかへる

◎鈍太郎

◎虎の子は山へ放せ

◎虎の子渡しをするやう

◎虎の子を養ふ

◎鳥の子を扱ふやう

ちノ部

◎智者のほとりの童わらわは習はぬ経を讀む

◎父の子母の子

◎千引の石は動かすとも親には勝たれず

◎稚子殺すが如し

五 養はれたる兒童



◎竹馬の戯れ

りノ部

◎利口な子より馬鹿な子が猶可愛い

◎律義者の子澤山

ぬノ部

◎竊みする子は憎からで、其の索取が恨らめしい

◎盗人を捕らへて見れば我子なり

をノ部

◎親の持たする子心



◎親は守りの神

◎親の心子知らず

◎親子は一世師は三世

◎親の善悪は子孫にむくゆ

◎親に似ぬ子は鬼子

◎親の守りで子が嬉しい

◎親の恩と水の恩は送られぬ

◎親の恩と冷酒は後に利く

◎親の罰と小糝雨はあたるが知れぬ

◎親の奔走は他人が憎む

◎親の光子に目鼻つける

◎親子は三界の首かせ

五 但野に現はれたる兒童







兒童を圖へる文學

二〇八

- ◎ 親のあまやかし、又あまやかし、又あまやかし、又あまやかし、子を捨つる、又あまちやで育てる
- ◎ 親の辱は子の辱、子の辱は親の辱
- ◎ 親の頭に松三本
- ◎ 親の光は七所照らす
- ◎ 親の目に灰ふる
- ◎ 親の物は子の物
- ◎ 親の奥歯で噛む子は他人が前歯でかむ
- ◎ 親は善をすゝる子は樂をすゝる、孫は乞食をすゝる
- ◎ 親はなけれど子は育つ
- ◎ 親は思へば子は尿たれる
- ◎ 親は親、子は子





- ◎ 親は女郎買ふ子は後生願ふ
- ◎ 親父の夜あるき息子の看經
- ◎ 親を睨むと縁になる
- ◎ 親と月夜はいつも善い
- ◎ 親すれより友すれ
- ◎ 親子でも金銭は他人
- ◎ 親無き後は兄が親
- ◎ 親の譲りの皮のふんどし
- ◎ 親の聲は神の聲
- ◎ 親の慾目
- ◎ 親の浅ましき
- ◎ 親ほど親を思へ

五 俚諺に現はれたる兒童





- ◎ 親の恩を子でおくる
- ◎ 親孝行は我が爲め子孫の爲め
- ◎ 鬼の面を冠ぶつて小兒を嚇す
- ◎ お乳母日傘
- ◎ 老ては子に従ふ
- ◎ 負ふた子より抱いた子
- ◎ 負ふた子を七日尋る
- ◎ 幼な馴染
- ◎ 親に跡を遺る
- ◎ 親の首繩を着る
- ◎ 親の死目
- ◎ 親の慈悲



- ◎ 親の罰
- ◎ 親の保で子嬉しい
- ◎ 親は千里に往けども子を忘れず
- ◎ 親まさり
- ◎ 親知らず齒
- ◎ 親たつ人
- ◎ 親の跡を履む
- ◎ 臣子の夢見るが如し

わノ部

- ◎ 我が子には目が無い
- ◎ 若き時は二度ない

五 眞實に現はれたる兒童





兒童を誦へる文學

- ◎ 若き時の苦勞は買うてせよ
- ◎ 若衆の親と床の後
- ◎ 若木の下で笠をぬげ
- ◎ 悪い子が氣にかゝる
- ◎ 若木に腰かけな
- ◎ 童いさかひ大人知らず
- ◎ 童のしどくばる
- ◎ 童と公方人には勝たれず
- ◎ 童の水莖と歌の五文字はなだらかなれ
- ◎ 童に花持たせたるが如し
- ◎ 童は風の子



かノ部

- ◎ 孝行も子による
- ◎ 孝行のしたい時分に親は無し
- ◎ 孝經で親の面を撲つ
- ◎ 餓鬼大將
- ◎ 孝は百行の本
- ◎ 癩の子でなり次第
- ◎ 可愛い子は棒で育てろ
- ◎ 可愛い子は打て
- ◎ 賢さが子は賢からず
- ◎ 賢からず水田に子を生む

五、眞實に現はれたる兒童



兒童を睡へる文事

三十四

◎蛙の子は蛙

よノ部

◎蟻と名がつけば我が子も憎い

たノ部

◎鷹匠の子は能く鳴をならす

◎大名の一人子

◎大名の懐兒のやう

◎唐人のまうし子

◎竹の子親まさり



そノ部

◎惣領の甚六

つノ部

◎杖も孫ほどかゝる

◎杖ほどかゝる子はない

◎杖の下からまはる子が可愛い

◎妻いとをしの子いとをし

ねノ部

◎寝入る小僧に粥かくる

五剛直書に現はれたる兒童

三十五





なノ部

- ◎泣く兒と地頭には勝たれぬ
- ◎泣いて育て、笑ふてかゝれ
- ◎七の子はなすとも女に心ゆるすな
- ◎啼く子も目を見る
- ◎七つ八つは惜まれざかり
- ◎泣く兒もあれば笑ふ兒もある

むノ部

- ◎娘一人に七藏あけた
- ◎娘一人に聲八人



うノ部

- ◎初子持は山の坊主に驚かす
- ◎運は子にあり
- ◎生れぬ先の襪襟定め
- ◎乳母の乳のあがりたる如し
- ◎産衣に寶盡くしの紋をつくる
- ◎うぶ兒はふ兒
- ◎生まれぬ前の父
- ◎氏より育ち
- ◎生みの親生みの子
- ◎瓜を二つに破つたやう

五 眞實に現はれたる兒童





◎瓜の蔓には茄子はならぬ

おノ部

◎負ふた子に救へられて淺瀬を渡る

◎債はず借らず子三人

◎鬼も十七山茶もにばな

やノ部

◎瘦兒にも産神

◎瘦兒にもかよる

◎瘦兒にはすね

◎瘦兒の聲高



- ◎瘦兒の物を火虫がせびる
- ◎瘦兒の酔好み
- ◎養子には臍の上へ帯をしめたものを貰へ
- ◎養子兒の癩の出たやう

まノ部

- ◎孫子の代までも
- ◎孫をかふより狗をかへ
- ◎孫子に手を引かれて牢屋
- ◎松は二葉より棟梁の思あり

けノ部

五 假名に現はれたる兒童





- ◎ 下衆の子と稗園子は三つまで
- ◎ 下衆腹ゲスハラ
- ◎ 血氣盛り
- ◎ 血氣にはやる

こノ部

- ◎ 子寶
- ◎ 子を思ふ夜の鶴
- ◎ 子を捨る藪あれども身捨る藪なし
- ◎ 子故の間に迷ふ
- ◎ 子を恨み身を嘆なげつ
- ◎ 子を一人育つれば屎うんち一升食ふ



- ◎ 子を持ちて知る親の恩
- ◎ 子に迷ふ親ごころ
- ◎ 子寶脛がほそる
- ◎ 子を知るものは親
- ◎ 子供は教へ殺せ馬は飼殺せ
- ◎ 子供喧嘩が親喧嘩
- ◎ 子供狂くるは泣き狂くるひ大人狂くるひは死狂くるひ
- ◎ 子供が火なぶりすると寐小便をする
- ◎ 子持を雇ふよりびつこを雇へ
- ◎ 子に使はるゝ身こそつられ
- ◎ 子は夫婦の間の鏡
- ◎ 子煩悶はんもんに子なし

五 眞實に現はれたる兒童







- ◎心なき子は親の故郷を語る
- ◎心弱き者は爺なし子を生む
- ◎五月子は養はず
- ◎小僧と障子は張る程よい
- ◎小僧に天狗が七ツ附いてゐる
- ◎小娘と小袋は油断がならぬ
- ◎小男一人は猫千疋に向ふ
- ◎小舅には困らぬが八口ちくちくにこまる
- ◎子とふぐりは荷にならぬ
- ◎子供だまし
- ◎子供友だち
- ◎子の一本



- ◎子は一世代夫婦は二世主従は三世他人は五世
- ◎子持になると瘡が物言ふ
- ◎子持盗
- ◎子持の腹へ馬の脊
- ◎呉服屋の童堅のへんじ
- ◎子供も猫にはまし

えノ部

- ◎えぼし親
- ◎穢多の子は皮を剥ぐ
- ◎ゑの子道知る
- ◎ゑの子火を踏たる





兒童を誦へる文學

てノ部

- ◎天狗様のまうし子
- ◎寺つゞきの子は卵からうなづく
- ◎手習子供の花見
- ◎弟子七尺去つて師の影をふます

あノ部

- ◎赤子を裸にしたやう
- ◎あまるにまゝ見なし

さノ部





◎三年たてば三歳になる  
◎三一小僧の哭説經

みノ部

- ◎三歳児の横草履
- ◎三歳児に花
- ◎三歳児の魂百までも
- ◎三歳児に腹の生へたやう
- ◎三歳児の智慧が七十まで

しノ部

◎死ぬ子みゆよし

五歳児に遊ばれたる見聞



すゝ部

◎末の子は血のあまり



(六) 隨筆に現はれたる兒童

隨筆に現はれたる兒童文學は我國古來の作品に於て極めて稀なり、たゞ僅に宗祇の兒歌、一茶の兒童記等三四に過ぎず其の教訓に關するものは、其類多けれども、そは教訓として今日其の價值を存するに止まり、兒童心理の研究資料としては價值頗る少し、故に本書には教訓的のものとしては、僅に益軒の童子訓を抄録し其他は之を省略したり。



# 兒教訓

宗祇法師



つらく、惟るに、世の中の、わるき若衆の、ふるまひを、けふ雨中の、徒然さに、大かた愛に、書きつくる。草のすさびもおこがまし、先第一に、かのみちの、其たしなみは、さらひにて、人にはすねて、いふりにて、人せりして、口さへきて、おとなの如く、茶は飲みて、人によりそひ、よりかゝり、さもむつかしき、よういふて、こがたなかりて、ちりはして、こせ事いひて、利口して、朝起はせて、晝寝して、手習ふことは、いやりて、戸かへ障子に、物書きて、里すきはして、手はすかて、たゝみ柱に、墨つけて、しら笑ひして、ほかげにて、人ももち



ぬ腹立て、友の若衆と、からかひて、日に幾度も、つかみ合ひ、親や坊主の、上いひて、物しかくと、教へねば、手のあがらぬも、道理やと、我とわがみに、理をつけて、親に逢ひたる時はかり、おとなしげなる、ふりをして、かげにてかはる、心こそ、さもつらく、思はるれ、かくこはせめて、四五年も、寺のすまひをするならば、少ししるしも、付くべきに、三年さへも、暮しかね、ほどなく里へ、引こみて、父母こめて、すいかいに、やうじつかはす、髪結はず、手足洗はず、爪きらず、むさくとして、あらし子の、子どもあつめて、くみあひて、足に物はく、事もなく、るのこ庭とり、追ひまはし、小鷹見えつゝ、四十雀しゝめすいめ、さいとりを、さすも似合ぬ、大がたなつかをば長く、こしらへて、火打ぶくろの、緒を見れば





山どりの尾の、しだり尾のながく、しくも、ふりさげて、さげ緒な、かより、打かへし、ぐりかたもとに、巻こめて、はかまのおびを、ゆるくしめ、前へたらりと、さしこぼし、紙こ道服うらばをり、こびんうしろに、とりまはし、さらばさいく、そりもせで、さかやき見れば、夏の野の、蘆の如くに、しげらせて、色よき小袖、重ねきて、人のえもんの、なんいひて、世に聞なれぬ、えぼし名を、我とさいく、付かへて、人のけんくわの、さやもちて、人こといひて、身は知らで、遊山しける、道にては、小歌曲舞、あとさきの、とめはつあはぬ、うたひをば、しどろもどろに、うたひなし、きげんよげなる、たかわらひよその、みるめも、思はるれ、さて又よそへ、呼ぶ時は、よき折ふしは、出もせで、時分うつつして、たびく、に、使をえても、ひ



ねくりて、たま／＼愛へ、きてだにも、あれへこれへと、しやうすれど、疊のへりへ、はひ付て、手をとり人の、引くときは、そばの柱に、しがみつき、立ちあがらぬも、げしからぬ、やう／＼座敷に、なをりつゝ、はしをとるより、程もなく、大くつろぎに、くつろひて、あたりの人の、汁菜を、きくしんなじに、こひとりて、心のまゝに、魚鳥の、骨噛み鳴らし………齒音高く、くふときは、老若共に、見ぐるし、かくて、中酒になりぬれば、すんののびたる、さかづきに、二つも三つも、酒受けて、中酒過ぎての、いひの湯を、汁にてうめて、こぶめかし、茶のこいづれの、用捨なく、昆布一切を、そのまゝに、口へ押込み噛みながら、問はず語りを、しいだして、物言ふ聲は、聞にくし、茶のこみなく、取り食ひて、用にも立たぬ、柿のさね





胡桃の皮を取り集め、向ひの人に投げつけて、かなたこなたへ、投げ舞はし、大人しき人ありぬれば、座敷もいまだ過ぎざるに、人の小座敷、小べやへも、案内無しに、押し入て、刀脇差、抜きすて、こはんおしいた、枕とし、譯なき口を、たきつゝ、人の刀をつばとぬき、きれんきれじの目利して、おのが刀の、物きると、系圖を言ふて、利口して、はたさぬ聲は、鳥辭がまし、そのみならず、あまつさへ、女おとこの、物がたり、皆くちくちに、………思ひ入たる雑談に、我身の上を、忘れ果て、さいくしげき、高笑ひ、人に聞かせん、用もなし、此色々の、なかばよりすでに遊びも、始まりぬ、ばくちの事は、中々に、沙汰の限のことなれば、筆に書くべきやうもなし、さすが、碁將碁、すこ六は、尋常の業の、事なれば、あるひは



手を見、手を見せじ、或は石の争に、恐ろしげなる、聲をして、富士や白山、八幡と、事もかけぬに、誓文し、石つき散らし、雜言し、互に腹を立てべくば、遊をしても、むやくなり、將碁の盤に、向ひては、時の興じやと、言ひながら、やがて詞をつめあひて、きんのでを、はり腹を立て、はやしめかし、からかひて、はんませ人に、つめられて、………ことは、もんだうす、まけにもなりて、何事も、わうてと云ひて、立ち去りぬ、これらは、せめて、十二三、十四五ほどの、若衆達、幼な心の、ありければ、許すところも、ありぬべし、これに、ましたる、大人でも、よきいけんを、ば言ひもせで、けつく色々、そやし立て、二人の若衆、すこめつゝ、いさかひさせて、笑ふこそ、かへすくも、りよぐわいなれ、かゝる、男の、したてには、すこ六盤に、取り



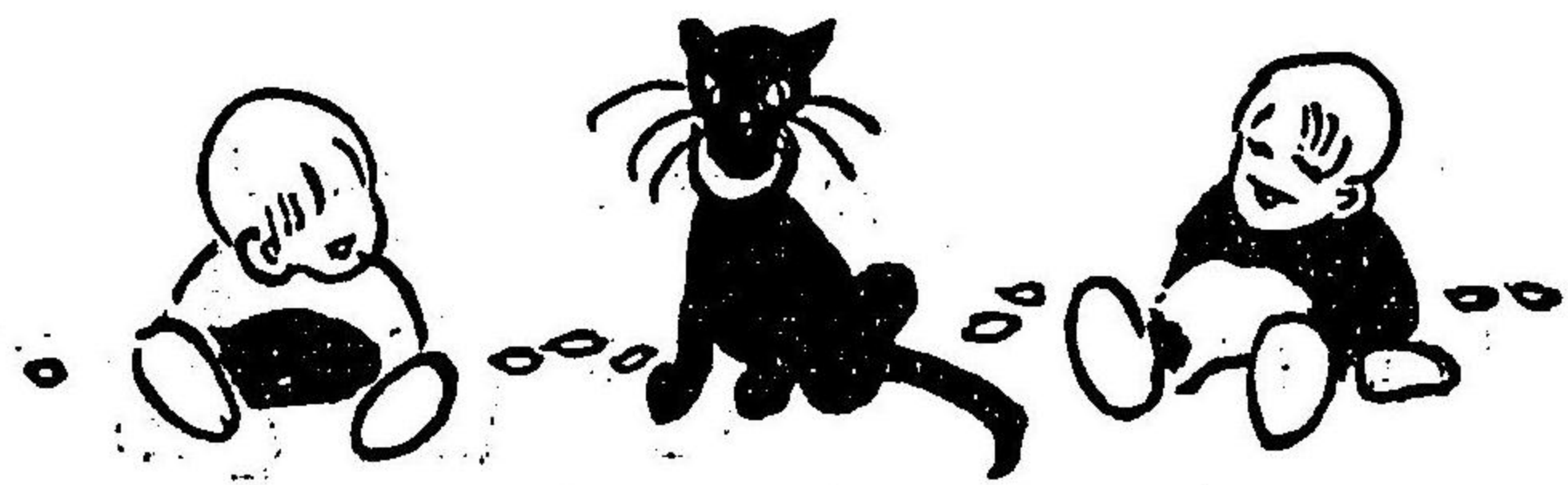


むかひ、刀きつはに、おしまはし、石たてさいをとるよりも、はやくていに、利口して、石のさしひき、あらげなく、すいに任せて、石はしり、互に心、一六に、ちがふさいのめ、争ひて、つくともせぬ、くびのほね、てうろくすんに、ぬきあげて、はやいさかひを、しさうなる、是かやくにん、夏のむし、火に入るよりも、あやうきに、しらせと言はぬ、人ぞなき、かくてばん敷、うちかさね、勝たる時は、機嫌能く、負けたる時は、腹を立て、とがなきさいを、投げめぐり、弓矢八幡、うつまじと、腰の刀を、抜きかけて、かねはたくと、うつときは、物狂はしく、凄まじや、此遊びとも、末になり、日も夕陽に、なりゆけば、盃すへて、坐をつくり、酒宴の坐にもなりぬれば、當世はやる、亂舞にも、心を掛けて、習はねば、鼓太鼓を、うつたにも、



夢にも知らず、語をば、しほがら聲に、たてふしを、拍子外れに、疾く遅く、しどろもどろに、語ひなし、さらばないしよに、ありもせで、人よりごとに、さし出て、客心なしに、人々に、……うち解けて、申さんために、たぶるとて、大盃に、さし受けて、人の物をば、食りて、くがいの義理は、かげはて、ぶせうのものに、こめられて、うちへふくれて、どんにして、るこなるかたへり、こんにて、理非を見知らで、ねはくちに、古き小袖の、あつわたを、みよをさよへて、うづみきて、年に似合はぬ、綿帽子、肩の上まで、引かけて、人に寄合ふ、座敷にて、……うち解けて、語る時詞の中に、骨ませて、聞き知れをも、聞き分けず、人は心のまんまるに、身なり仕合しと、やかに、こころ言葉の、かどもなく、流石男の、たましひは、はつきとし





たる、人をこそ、奥床しくも、思はるれ、心の中は、夏の日、照らせて庭に、たまりける、水よりも、猶ぬるくして、うへのおもては、凄まじや、まなこのかども、見苦しう、かくて月日も、杉の門、明けぬ暮れぬと、するほどに、さすがに能の、つきたさに、弓まり連歌、兵法に、心を少し、かけ帯の、むすぶ連歌の、月並の、人数になりて、折々の、會の座敷に、連なりて、十七、十四、ある文字を、袖の下にて、敷へかね、長く短く、句をつくり、心に染まぬ、稽古して、次第々々に、草臥れて、連歌は更に、成り難し、弓の稽古を、始めんと、師匠を呼びて、習ふ時、おしがつての、たうつくり、むねはらこしの、つめやうを、五日三日、習へども、是も程なく、草臥れて、師匠をやがて、おしかへし、後には來れど、出合はず、又ある時は、長閑なる、春の夕の、



暮方に、蹴鞠の稽古を始めんと、ふつと心に、思ひ出し、夜晝分かず、其庭に、柳櫻に、松楓、四本が、りを、こしらへて、花やかならぬ、しりつまげ身なり、足ぶみ、つめ開らき、じぶんぶんを、辨へず、はひそく多く、するほどに、相手に人の、さらひけり、蹴鞠も上がらぬ、ものをとて、又打ちすて、……庭には、草を、茂げらせて、蹴鞠は、彼處に、投げすて、わらへ子供に、ふまれつ、空しくなりて、果てにけり、さて、兵法に、取りかゝり、小太刀、鎌ぼこ、十字、槍、薙刃に、木刀を、其の色々に、拵らへて、夜晝分かず、かためきて、或は、手敷、二ツ三ツ、或は、五ツ六ツ七ツ、ところまだらに、つかひなし、これも中には、打すて、はての一ツも、覺えず、て、萬の能の、ならざるは、心の解けぬ、故ぞかし、かくて、月日をつもりつ、あまた





の子供育てゝも、唯徒らに育つれば、身をも家をも、もち下  
 げて、賤山がつに、異ならず、あな淺ましや、同じくば、人とな  
 りての、思ひ出に、春は霞に、棚引かれ、園の鶯、軒の梅、尾上の  
 櫻、青柳の糸に心を、うちへて、程なく暮れて、ゆく春の、夏  
 は垣根の、卵の花の、雪めづらしく、あらねども、布を晒すが、  
 如くなり、はしのもとの、せうひは、夏に入てぞ、開きける、日  
 かげを待や、朝顔の、露のめぐみも、哀なり、黄昏ときに、あら  
 ねども、名は夕顔の、花白く、庭の橋、うちかはり、昔の人を、思  
 ひ出で、戀しき人の、うつり香に、山時鳥、一聲は、もの思へと  
 や、すだくらん、脚踏いろく、岩間より、花咲く、澤の、杜若、濁  
 りにしまぬ、蓮葉の、花の色々、咲き滿ちて、光をかざし、飛ぶ  
 螢、萩の上葉を、そよそよと、かたへす、しき、風の音、秋も近





しと、知られけり、色づく山の見え渡り、花に劣らぬ紅葉の、  
露の雫は、世の中の、後れ先だつ、ためしかや、薄紫の、藤袴、さ  
つなれにし、虫の音も、うち亂れたる、糸薄、機織る虫の、音  
を立て、夏を忍ぶや、松虫の、聲ふりたつる、鈴虫の、長さ夜  
寒を、我ひとり、いたく、詫るは、さりと、す、物哀なる夕暮を、  
など訪ふ人の、なかるらん、初雁が音の、一列は、空頼めなる、  
ふみとりや、定めなき世の、習とや、移るひ、曇き、白菊の、霜を  
いたく、翁草、盛なる身も、行末の、衰へ果つる、有りさまは、  
草木の上にも、知られたり、月による、く、啼きて、妻戀鹿の、  
涙をも、袖に宿して、冬はまた、霜雪蔽の、冴ゆる夜、聞の木  
がらし、聞あかし、鳴くや、千鳥も、こほり江に、波に浮寝の、を  
しかもめ、哀をかけて、若き時、心すなほに、尋常に、あひく





として、憎げなく、人の言ひよる、折ふしは、たとひ心にあは  
すとも、もらさぬやうに、あひしらひ、たゞ何となく、かくと  
なく、かきといめたる、水莖の、うちをき難く、あらんこそ、見  
るにかたちも、ますべけれ、此ことは、みなる人の、とりど  
りにある、事なれど、心の水の、あさくとかきあつめたる、  
藻鹽草、よその見る目も、耻かしきかな。(群書類從)



京わらんへ

作者未詳

まづ正月は門に立つとよ松竹の、蔭に羽子つく手鞠と  
るぶりくぎつちよを手にふれて、玉を打出の破魔弓や  
七草なづなよとんどやおほん、加留多寶引きさらぎや、初  
午まゐりの土産とて、鈴やつばく風ぐるま、彌生になれ  
ば庭鳥合せ、とりくて雛の殿の妹脊ごと、二八あまりは  
大人びて、色に出づるや、櫻色、梅や椿の花よりも、卯月のけ  
ふの御まつりに、なごり惜しきは、せんだんたんごへ、たん  
ごたんごく、端午の節句へ、よりきあやめに、兜を軒端に  
かざらせ、うちあひうちつれ、竹馬の、蹴行く駒の足早み、早





や祇園會の夕涼み、盃來いとて水遊び、たもと涼しき夏衣、  
 ひよと明くれば初秋の盆の踊は伊勢踊、きそん十七とら  
 のとし、參る薬師は寅やくし、さつさとほりやれ、さつさふ  
 れく振袖の染めし模様の月見草、小襦に縫の菊重ね、さ  
 て初冬や神無月、つくや亥子の餅花も、小春の名にや匂ふ  
 らん、霜月は産神の、あふたけ、たけく師走には、をとこの  
 餅ついたちや、雪ころばかし雪まろめ、四季折々のたはぶ  
 れは、鬼の來ぬまと歌ひしも、思へば思へば此かみの昔な  
 りけり、今の世にせんだんごの大明神、つきす變らすわら  
 んべの、福德祈る守神とて、おしなめ歩みをはこびけり。

(日本歌謠類集)



### おさな子

小林一茶

(二)

こぞの夏竹植る日の頃、うき節しげき浮世に生れたる  
 娘、恐にして物に敏かれとて、名をさと、呼ぶ、今年誕生日  
 祝ふ頃ほひより、てうちくあわ、天窓てんく、頭振り  
 ながら、同じき子ども、風車と云ふものを持てるを、荐りに  
 欲しがりてむつがれば、とみに取らせける、やがて、むしや  
 くしやぶつて捨て、露程の執念無く、直に外の物に心移  
 りて、そこらにある茶碗を打破りつ、それも直ちに倦み  
 て、障子の薄紙をめぐむしるに、能く爲たくと譽む

六 塵世に現はれたる兒童





れば、誠と思ひ、さやらくと笑ひて只捲りに捲りぬ、心の内一點の塵も無く、名月の皎々しく清く見ゆれば、跡無き俳優見るやうになか／＼心の皺を伸しぬ、又人の來りてわん／＼は何處にと問へば、犬に指し、かあ／＼はと問へば、鳥に指すさま、口元より爪先まで愛敬零れて愛らしく言は、春の初草に胡蝶の戯るよりも柔しくなん覺え侍る、此おさな佛の守し玉ひけん、追夜の夕暮に持佛堂に蠟燭照らして、鐘打ならせば、何處にゐても急がはしく這ひ寄りて、早敷の小さき手を合せて、南無々々と唱ふ聲しほらしく、床しく長束く、殊勝なり、其れにつけても己れ頭には幾らの霜を戴き、額には屢々浪の寄せ來る齡にて、彌陀のむすべも知らず、浮々月日を費すこそ二ツ子の手前も



耻かしけれと思ふと、其座を退けば、はや地獄の種を蒔き、膝に群がる蠅を惡み、膳を巡る蚊を替りつゝ、剃へ佛の戒めし酒を飲む、折から門に月さして最涼しく、外に盃の踊の聲すれば、直に梳投げ捨て片ゐざりに、ゐざり出で、聲を揚げ手真似して、嬉しげなる子を見るにつけつゝ、何時しか彼をも振分髪のためにして、なごらせて見たらんに、は、廿五菩薩の管絃よりも遙に優りて興ある業ならむと、我身に積る老を忘れて憂をば晴らしける、かく日すがらをしかの角の束の間も、手足を動かさずといふ事無く、遊び疲れるものから、朝は日のたけるまで眠る、其内ばかり母は正月を思ひ、飯焚そこら掃き片付けて、團扇ひらひら汗をさまして、圍に泣聲のするを、目の覺める合圖と定





め、手かしくくも抱き起して、裏の島に尿やりて乳房あてがへばすはくくと吸ひながら胸板のあたりを打ちたゞきて、にこく笑顔をつくるに、母は長々胎内の苦も、日々襪裾の穢らしきも、ほとく忘れて、衣のうら玉を得たるやうに撫でさすりて、一人喜ぶ有様なりけらし

蚤の跡敷へながらに添乳哉  
よりく思ひよせたる小兒をも遊びつれにもと、こゝに築めぬ

柳からももんぐあと出る子哉  
蓬萊になむくといふ子哉  
年間へば片手出すや更衣

小兒の行衛を祝して



たのもしやてんつるてんのはつ裕  
名月を取つて呉れろと泣く子哉  
子寶がきやらくわらふ椿火哉  
あこが餅くとして並べけり  
妹が子の背負たなりや配餅  
餅花の木蔭にてうちあはく哉  
涼風のふく木へ縛るわが子哉  
わんぱくや縛られながら呼ぶ笠

其引

あゝたつたひとり立ちたる今年哉  
子にあくと申す人には花もなし  
袴着や子の草履とる親ごころ

六 隨筆に現はれたる兒童

貞徳  
芭蕉  
子堂

二四九



兒童を臨へる文章

二五〇

花といへもひとついでやちひさい子  
春雨や格子より出す童の手  
早乙女や子の泣く方へ植て行く  
折とても花の木の間のせかれ哉

子 羅  
東 菜  
葉 拾  
其 角

箸とり初めたる日

鴉啼くや赤子の頬をすふ時に  
男にさらはれて親のもとに往けるに、おのが子の初節句  
見たくも晝は人目もしげれば

去られたる門を夜見る職かな

讀人不知

子を思ふ實情さもと聞えて哀なり、猛きものゝふの心を  
やはらぐるとは、かゝる真心をいふなるべし、いかなる鬼  
男なりとも風の便りにもさゝなば、いかでか復び呼びか



へさいらめや

所有畜類是世々親族となん  
親をしたひ子を慈む情何ぞ隔てのあるべきや

人の親のからす追けり雀の子  
夏山や子にあらはれて鹿の啼く  
負て出て子にも鳴する蛙哉  
鹿の親笹吹く風にもどりけり  
小夜時雨なくは子のない牝鹿哉  
子をかくす藪の通りや啼雲雀

鬼 貫  
五 明  
東 陽  
一 茶

(二)

樂み極りて愁起るは、うき世の習ひなれば、また樂みの  
半ばならざる千代の小松の葉ばかりの笑ひさかりなる

六 隱筆に現はれたる兒童

二五一







みどり子を寝耳に水のおしくる如き、あら／＼しき痘の神に見こまれて、今水腫のさなかなれば、やをら咲ける初花の泥雨にしほれたるにひとしく側に見る目さへくるしげにぞありける、これも二三日経たれば痘はかせ口に、雪解の峽土のほろ／＼落るやうに、瘡蓋といふものれば祝ひはやしてさん儀法師といふものを作りて、笹湯浴せる真似して神は送り出したれど、ます／＼弱りてきのふよりけふは頼み少く終に六月廿一日の葬の花と共に、この世をしほみぬ、母は死顔にすがりてよ／＼と泣もむべなるかな、この期に及んでは行く水の復び歸らず、散花の梢にもどらぬくひごとなど、あきらめ顔しても、おもひ切り難きは恩愛のきづななりけり

露の世は露の世ながらさりながら

一茶

去四月十六日みちのくにまからんと、善光寺まで歩みけるを、さはることありてやみぬるも、かゝる不幸あらんとて道祖神のとゝめたまふならん

其引

子におくれたる頃

落梧

似た顔のあらば出て見んひと踊

母に後れたる子の哀さに

おさな子やひとり飯くふ秋の暮

尙白

娘を葬りける夜

夜の鶴土に蒲團も着せられず

其角

孫娘におくれて三月三日野外に遊ぶ

六 露草に現はれたる兒童

二五三







兒童を匿へる文學

宿を出て難わするれば桃の花

二五四

猿 雛

娘身まかりけるに

十六夜やわが身にしれと月の缺

杉 風

猶子母に放れしころ

柄をなめて母尋ぬるや塗うちは

來 山

愛子を失ひて

春の夢氣のちがはぬもうらめしい

同

子を失ひて

蜻蛉つりけふはどこまで行たやら

千 代

やんことなき人々の歌もこゝろに浮ぶまでにふとしるし侍りぬ

讀人知らず



哀なり夜半に捨子の泣きやむは

はゞに添乳の夢や見つらん

爲 家 卿

捨てゝ行く親したふ子のかたいざり

世に立ちかねて音こそなかなれ

兼 輔 卿

人の親のこころは闇にあらねども

子を思ふ道に迷ひぬるかな

ひらさきの里近きあたりとある門に炭團ほとなる黒き  
巢鳥を捕りて籠ふせしてありけるに其夜親鳥らしく夜  
すがら其家の上に鳴ける哀さに

子を思ふ闇にやかあい、くと

六 隱室に現はれたる兒童

二五五





聲をからすの、鳴きあかすらん 一 茶

盗人已が古郷にかくれて縛られしに

業の鳥畏を巡るや村時雨

御成場所に鳥どもの餌蒔をしたふ不便さに

人肥き鶴よどちらに箭があたる

箭の下に母の乳を呑む鹿の子哉

さすがのさつ男も登切りしは斯かる折になんありける

(三)

下總國布川の郷來見寺のかたはら田中の塚に、菰四五  
枚引張て酒しる叟あり、味噌するわらはあり、あやしと木  
がくれて窺ひ侍るに、初孫まうけしなど笑ふ聲して、いと  
ゆうに志も優しげなる青女の麻といふ物豎にまさそへ







花撫子の雨をおひたるさまに少し打萎れてなやめる容  
のあからさまに見ゆかゝるいぶせき敷原にあるべき體  
とは覺へず、まさしく百鬼のふしぎをなすか、狐狸の人の  
目くらますかとおある人に問へば、是は此のほとり此の門  
になつて、一文半錢の餅みを受けて世を過ぐす古乞食と  
なん、誠にその樂む所王公といふとも、此外やあるべき財  
たくはへねばぬす人の憂なく家つくらねば火災のおそ  
れなし、幸にして心を養ふことはなか／＼、祿ある人にも  
過たりといふべし、綾羅錦繡の美しく、さも彼等が目には、  
雀蚊虻の前を遇るとや見ん、いでこのうちの趣は、離婁が  
目にもいかで見分くべき、今宵は、婿子初七夜の祝に、其黨  
を集めて、子孫長久をいのるなるべし



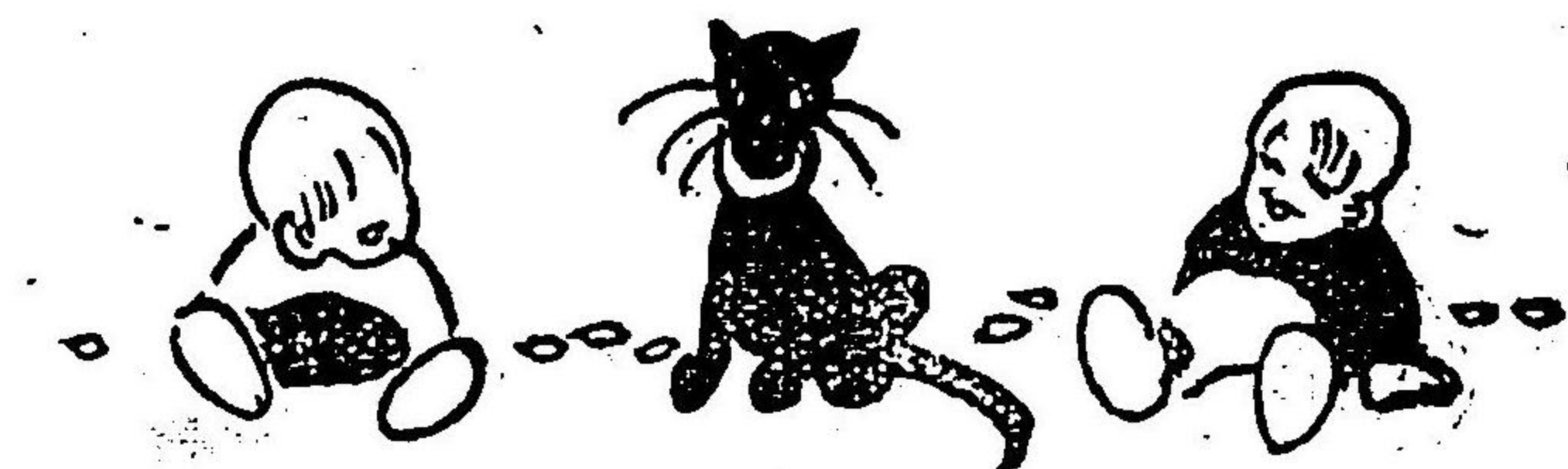


和俗童子訓

貝原益軒

凡そ小兒を育つるには始めて生れたる時乳母を求むるに必ず温和にして慎みまめやかに詞少なき者を探ぶべし乳母の外付き随ふ者をえらぶも大やう斯の如くなるべし始めて飯を喰ひ人の面を見て悦び怒る心を知る時より常に其の事に随ひて時々教ふればやよおとなしく成りて戒むる事易し故に幼き時より早く教ふべしもし教へ戒むる事おそくして悪しき事をおほく見習ひ聞き習ひくせになりひが事出来て後教へいましむれども始めより心にそみ入りたる悪しき事心の内に早くある





じとなりぬれば、改めて善に移ること難し、たとへば小兒の手習するに始め風體あしき手本を習へば、後に能き手を習ひても移り難く、一生改め難きが如し、第一いつはれること、次に氣隨にてほしいまふなることを許すべからず、やんごとなき大家の子は、殊に早くいましめ教へざれば、年長じては勢強く位高くして、諫め難し、凡小兒のあしくなりぬるは、父母、めのと、かしづきなる人の、教の道知らずして、其あしき事を許し、したがひほめて、其の子の本性を害ふ故なり、或は暫く泣聲を止めんとて、欺きすかして、姑息の愛をなす、其事誠ならざれば、則是偽を教ふるなり、又戯れに恐しき事どもを云ひ聞かせ、おどしいるれば、後に憶病の癖となる、武士の子は、殊に是を戒むべし、幽霊ば



けもの、怪しく誠なき物語、必いまして聞かしむ可からず、或は小兒の氣にさからひたる者をば、理を曲げて小兒の非をそだて、そらうちなど、すれば、驕慢の心出でくるものなり、小兒をもてあそびて、我が心を慰めんが爲に、様々の詞にてそびやかし、苦しめ、怒り争はしめて、僻み曲れる心を付けむさぼりねたむ心ざしを引き出だす、しかのみならず、父母の愛過ぐる故、あまえて、父母を恐れず、兒を蔑にし、家人を苦しめ、よろづ恣にして、人を侮る、戒むべき事を反りて進め、答むべき事を却つて笑ひ、色々あしき事どもを見聞かせ言ひ習はせしならはせて、やうやく年長じ智慧出で来る時に至つて、俄に始めて戒むれども、其の悪しき習はし年と共に長じ、久しくならひそみて、本性も等



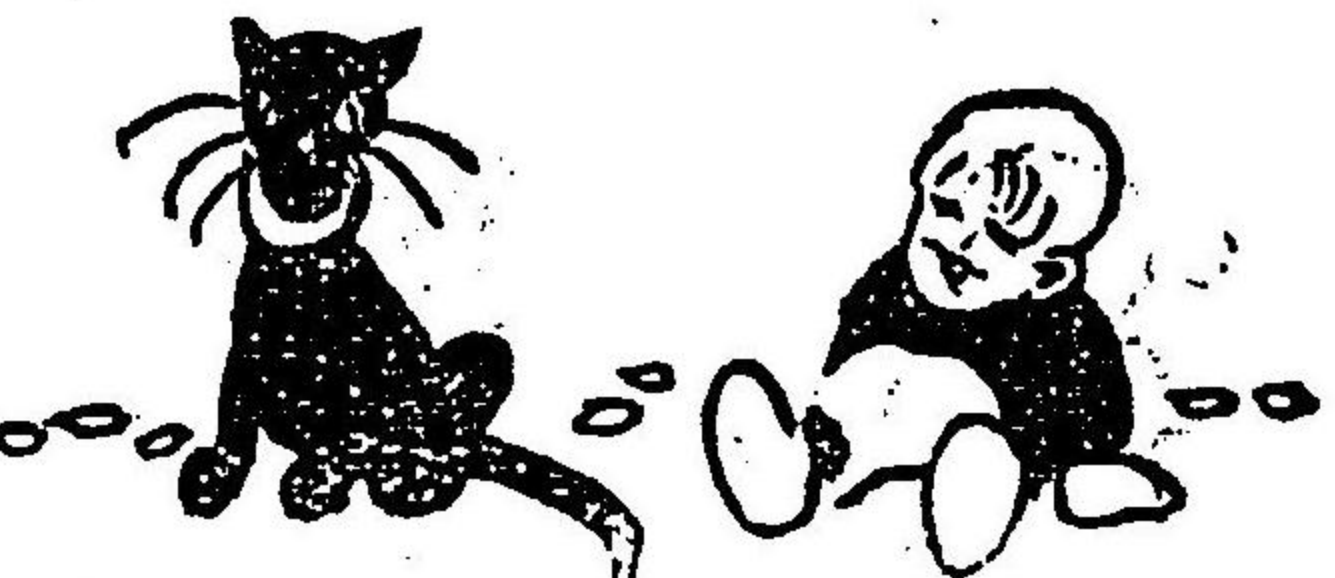


しくなりにたれば、諫を用ひず幼き時に教へなく、年長じて俄に諫むれども、隨はざれば本性悪しく生れつきたるとのみ思ふこと、いとおろかに感<sup>か</sup>ひの深き事ならずや。凡小兒を育つるに初生より愛を過すべからず、愛過ぐれば却て子を損ふ……幼生には父母の古き衣を改めぬいてきせしむべし、絹の新らしくして温なるは熱を生じ病となる、古語に凡そ小兒を安からしむるには、三分の飢と寒とをおおべしと云へり、三分とは十の内三分を云ふ、此の心は少しはうやし、少しは冷やすがよしとなり、是れ古人小兒を保つ<sup>たも</sup>の良法なり、世俗是を知らず、小兒に乳食を多く與へて飽かしめ、甘き物菓物を多く食はしむる故に、氣ふさがりて必ず脾胃を破り病を生ず、小兒の不慮

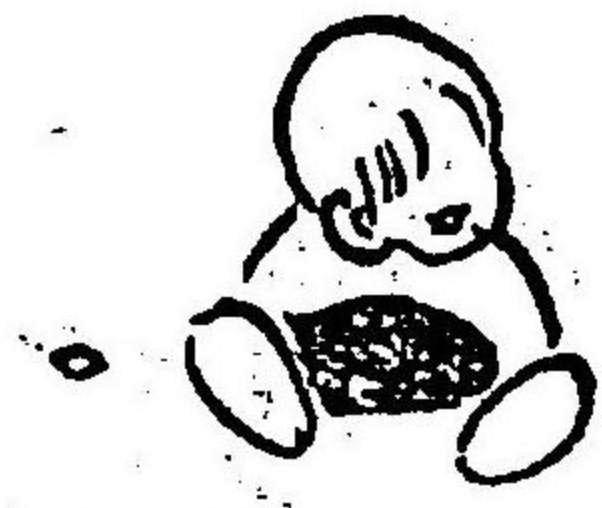


に死する者は多くは是によれり、また衣をあつくして温め過せば熱を生じ、膿氣をもらすゆる筋骨ゆるまりて身弱し、皆是病を生ずるの本なり、唐も大和も古より童の衣の脇をあくるは童子は氣さかんにして熱多きゆる熱をもらさんが爲なり、是を以て小兒は温め過すがあしきことを知るべし、天氣よき時は折々外に出して風日にあたらしむべし、斯の如くすれば膚<sup>はだ</sup>堅く血氣強くなりて風寒に感せず、風日に當らざれば膚もろくして風寒に感じ易く煩ひ多し、小兒の養ひの法をかしづき育つる者に能く云ひ聞かせ教へて心得しむべし。小兒を育つるには前にも聞えつるやうに、先づ乳母がしづき従ふものを撰ぶべし、心穩にして邪なく慎しみて





言葉少きをよしとすむるがしこき口さく偽りの詞多く  
心邪にして僻み氣狂く恣に振舞ひ酩酊を好むを惡しと  
す、凡そ小兒は智なし、心も詞も萬の振舞も、皆其のかしづ  
き隨ふ者を見習ひ聞きならひて彼に似するものなり、乳  
母かしづき隨ふもの惡しければ、育つる子それに似て惡  
しくなる故に、其人をえらぶべし、貧賤なる家には人を撰  
ぶこと難しといへど、此心得あるべし、況や位高く祿重き  
家をや。



凡そ子を教ふるには父母嚴にきびしければ子たる者  
恐れつゝしみて親の教を聞きてそむかず、是を以て孝の  
道行はる、父母柔らかにして嚴ならず、愛過ぐれば子たる  
者は父母を恐れずして教行はれず、戒を守らず、是を以て



父母を侮りて孝の道立たず、婦人または愚なる人は子を  
育つる道を知らず、常に子ををこらしめ氣隨なるを戒め  
ざる故、其驕年の長するに従ひて、いよくます、凡夫は心  
晦くして子に迷ひ愛に溺れて、其子の惡し事を知らず、古  
歌に「人の親の心はやみにあらねども子をおもふ道に  
感ひぬるかな」とよめり、唐土の諺に「人其子の惡しき  
を知るなし」と云へるが如し、姑息の愛過ぐればたとひ  
惡しき事を見つけてもゆるして戒めず、凡そ人の親とな  
る者は、我子に増る寶なしと思へど、其子の惡しき方に移  
りて後は身を失ふことをも、かねて辨へず、居ながら其子  
の惡に陥るを見れども、我が教なくして惡しなりたる事  
をば知らず、只子の幸なきとのみ思へり、また其の母は子





の悪しき事を父に知らせず常に子の過を蔽ひ隠すゆゑ  
 父は其子の悪しきを知らず禁せしめざれば、惡終に長じ  
 て一生不肖の子となり、或は家と身とを保たず淺ましき  
 事ならずや、程子の母の曰く、子の不肖なる故は、母其のあ  
 やまちをおほひて父知らざるによれりと云へるも、宜なり

小兒の時より心持柔らかに人を慈み情ありて人を苦  
 しめ侮らず、常に善を好み人を愛し仁を行ふを以て志と  
 すべし、人我が心に叶はざるとて、顔色をはげしくし詞を  
 あらくして人を怒り罵るべからず、小兒もし不仁にして  
 人を苦しめ侮りて情なくば早く戒むべし、人に對して温  
 和なれども其身正しければ幼きとて人侮らず



凡そ小兒の教は早くすべし、然るに凡俗の智なき人は、  
 小兒を早く教ふれば氣碎けてあしと、只其心に任せて置  
 くべし、後に智慧出來れば一人よくなるといふ、これ必ず  
 愚なる人の言ふことなり、此言大なる妨なり、古人は小兒  
 の始めて能く食し、能く言ふ時より早く教ふ遅く教ふれ  
 ば悪しき事を久しく見聞きて、先入の言心の内に早く主  
 となりて、後に善き事を教ふれども移らず、故に早く教ふ  
 れば入り易し常に善き事を見せしめ聞かして、善き事  
 にそみ習はしむべし、おのづから善にすゝみ易し、悪しき  
 事も少しなる時早く戒むれば去り易し、惡長じては去り  
 難し、古語に「兩葉不去將用斧柯」と云へるが如し、婦人及無  
 學の俗人は小兒を愛する道を知らず、姑息のみにして、只





甘きものを多く食はせ、よききぬを暖かに着せ、恣に育つるをのみ其子を愛すると思へり、是人の子をそこなふわざなる事を知らず、今の世其父禮の好みて其子の幼き時より躰を教へ和禮をならはす人は、必ず其子の作法よく立居ふるまひ、人に交り不束ならず、老に至るまで威儀よし、是れ其父早く教へし力なり、善を早く教へ行はしむるも、其のしるし亦斯の如くなるべし



小兒の時紙、齋を上げ破魔弓を射、獨樂をまはし、毬打の玉を打ち、手球をつき、端午に旗人形を立つる、女子の羽子をつき、あまがつをいだき、雛をもてあそぶの類は、たゞ幼き時好めるはかなき戯にて、年長じて後は、必ずすたるものなれば、心術に於て害なし、おほやう其好みに任すべし、



されども費多く飾り過ごし、好み過さばいましむべし、ばくちに似たる遊はなさしむべからず、小兒の遊びを好むは常の情なり、道に害なき業ならば、強て押へかゝめて其氣を屈せしむべからず、只後にすたらざる遊び好みは打任せ難し、

およそ人の惡徳は、矜なり、矜とはほこるとよむ、高慢の事なり、矜なれば自是として其惡を知らず、過を聞きても改めず、故に惡を改めて善に進む事難し、たとひ勝れたる才能ありとも、高慢にして我が才にほこり人を侮らば、是凶惡の人といふべし、凡そ小兒の善行あると才能あるとを譽むべからず、高慢になりて心術を損ひ我が恐なるも、不徳なるも知らず、我に智ありと思ひ、我が才智にて事





足りぬと思ひ、學問を好まず人の教を求めず、もし父として愛に溺れて子の悪しきを知らず、性行よからざれども君子の如く譽め、才藝つたなければ勝れたりと譽むるは恐にまよへるなり、其の善を譽むれば其善を失ひ、其藝を譽むれば其藝を失ふ、必ず其善を譽むることなかれ、其子の善となるのみならず、人にも愚なりと思はれていと口惜し、親の譽むる子は多くは悪しくなり、學も藝も拙きものなり、篤信會て云へり、人に三愚あり、我をほめ、子をほめ、妻をほむる、皆是れ愛に溺るゝなり

子弟を教ふるに如何に愚不肖にして、若く賤しきとも、甚だ怒り罵りて顔色と言葉を荒らゝかにして、悪口して耻しむべからず、此の如くすれば子弟我が非分なる事を



は忘れて、父兄の戒を怒り恨みて背き随はず、却て父子兄弟の間も不和になり、相破れて恩を損ふに至る、只從容として嚴正に教へ、幾度もくり返してやうやくつけ戒むべし、是れ子弟を教へ人材を養ひ成す法なり、父兄となれる人は此心得あるべし。

小兒に初めて書を授くるには文句を長く教ふ可からず、一句二句教ふ、また一度に多く授く可からず、多ければ覚え難く覺えても堅固ならず、其上厭ひ倦みて學を嫌ふ、必ず退屈せざるやうに少しづつ授くべし、其の教へやうは初めは只一字二字三字づつ、字を知らしむべし、其後一句づつ教ふべし、既に字を知り句を覚えれば小兒をして自から讀ましむべし、一句を教ふるにまづ一句を讀み覚え





させ熟讀すれば次の句を又右の如くに讀ましめ、既に熟讀して前句と後句と通讀せしめて止むべし、斯の如くにするること數日にして、後又一兩句づゝ漸に添へて授くべし、其後授くるにやうやく字多ければ、分けて二三次となして授け讀ましめ、其の二三次各熟讀して合せて通讀せしむ、若し其の中覚え難き所あらば、其所ばかり又數遍讀ましむ、また甚だ讀み易き所をば分ちよむ時はよむべからず、是れ省功の法なり

小兒の文學の效は事しげくすべからず、事しげく文句多くしてむつかしければ、學問を苦しみて疎んじ嫌ふ心出来ることあり、故に簡要をえらび事少く教ふべし、少しづゝ教へ讀み習ふ事を嫌はずして、すき好むやうに教ふ



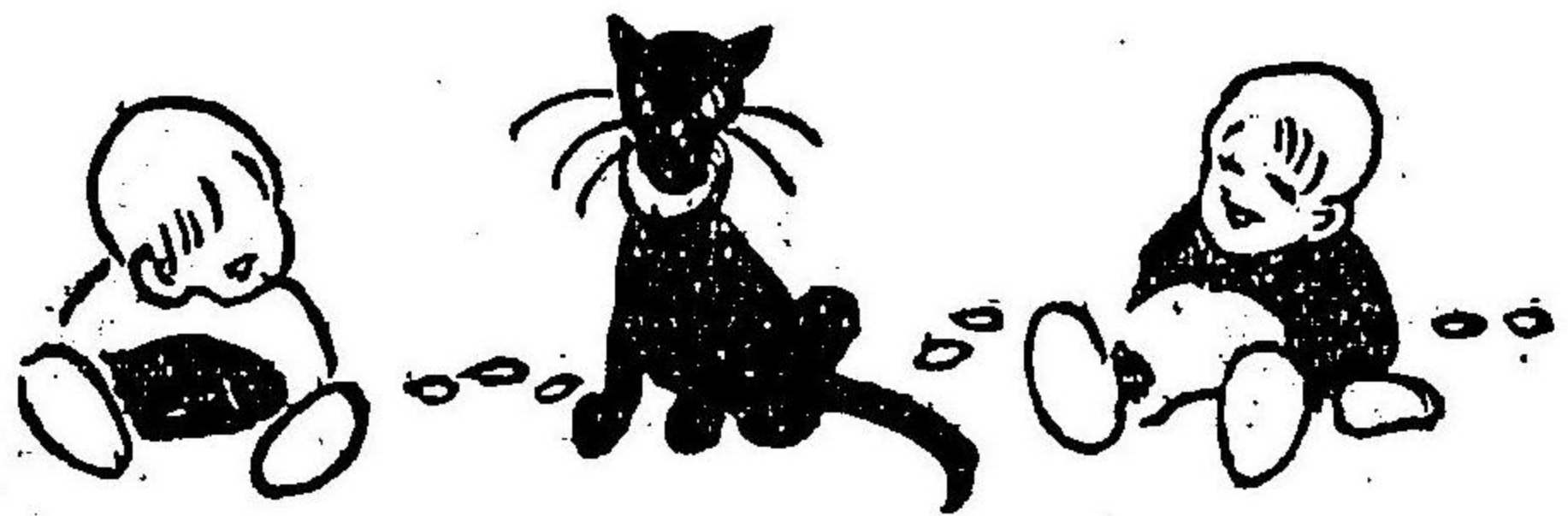
べし、むつかしく辛勞にして其氣を屈せしむ可からず、日々のつとめの課程をよき程にみじかく定めて、日々に怠なく進むべし、凡そ小兒を教ふるには、必ず師あるべし、もし外の師なくば、其の父兄自から日々の課程を定めて讀ましむべし、父兄辛勞せざれば、教行はれず

古もろこしにて小兒十歳なれば、外に出して、晝夜師に隨ひ、學問所に居らしめ、常に父母の家におかず、古人此法深き意あり、如何となれば、小兒常に父母の側に居て、恩愛にならへば、愛とたのみ、恩になれて、日々にあまへ、氣隨になり、艱苦の勤なくして、徒らに時日を過し、教行はれず、且孝悌の道を父兄の教ふるは、我が身によく仕へよとのすゝめなれば、同じくば、師より教へて行はしむるが宜し、故



に父母の側をはなれ、晝夜外に出して、教を師にうけしめ、學友に交らしむれば、おごり怠りなく、智慧日々に明らか、仁義日々に正しくなる、是古人の子を育つるに、内にをらしめずして、外に出だせし意なり。

およそ、書を讀むには必ず先づ、手を洗ひ心に慎み、容を正しくして、几案のはとりを拂ひ、書冊を正しく机上におき、跪きて讀むべし、師に書を讀み習ふ時は、高き几案の上に置く可からず、帙の上、或は文匣、矮案の上に乗せて讀むべし、必ず人の踏む席上に置くべからず、書を穢す事なかれ、書を讀み終らば、もとの如く納むべし、もし急速のことありて、たち去るとも必ずをさむべし、又書をなげ書の上を越ゆべからず、書を枕とする事なかれ、書の腦を卷きて



折りかへすこと勿れ、唾を以て幅をあくる事勿れ、古紙に經傳の詞義、聖賢の姓名あらば、慎しみて他事に用うべからず、又、君上の御名、父母の姓名ある故紙をも穢すべからず。

凡そ女子を愛し過して、恣に育てぬれば、夫の家に行きて必ずをこたりて、他人の氣に合はず、終に舅に疎まれ、夫婦不和になり、追ひ出され、耻をさらすもの多し、女子の父母我が教なき事を耻ぢずして、舅夫の悪しきとのみ思ふこと愚なり、父母の教なかりし女子は、夫の家に行き、舅の教正しければ、せわらしく堪へ難く思ひて、舅を恨み、謗り中悪しくなる、親の家にて教なければ、斯の如し。(和俗童子訓)







發行所

東京市麹町區  
總町二丁目二番地

洛陽堂

接警口座東京二〇九一四番



明治四十三年四月廿八日印刷  
明治四十三年五月一日發行

發行部啟  
自一至四

兒童を誦へる文學集  
定價金壹圓

著者 高島平三郎

發行者 東京市麹町區總町二丁目二番地  
河本龜之助

印刷者 東京市小石川區久堅町百〇八番地  
山田英二

印刷所 東京市小石川區久堅町百〇八番地  
博文館印刷所

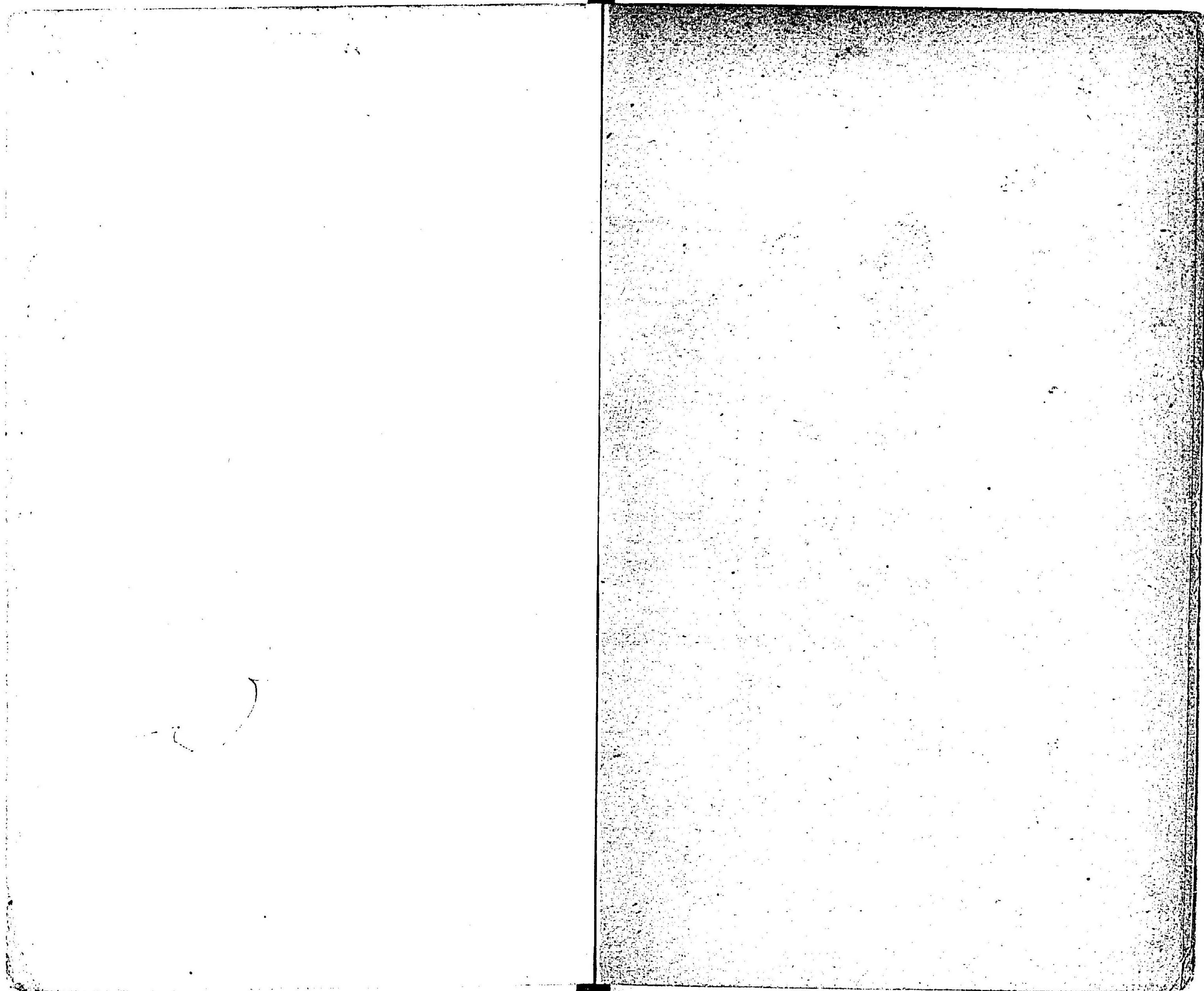


兒童を誦へる文學終

兒童を誦へる文學

二七六









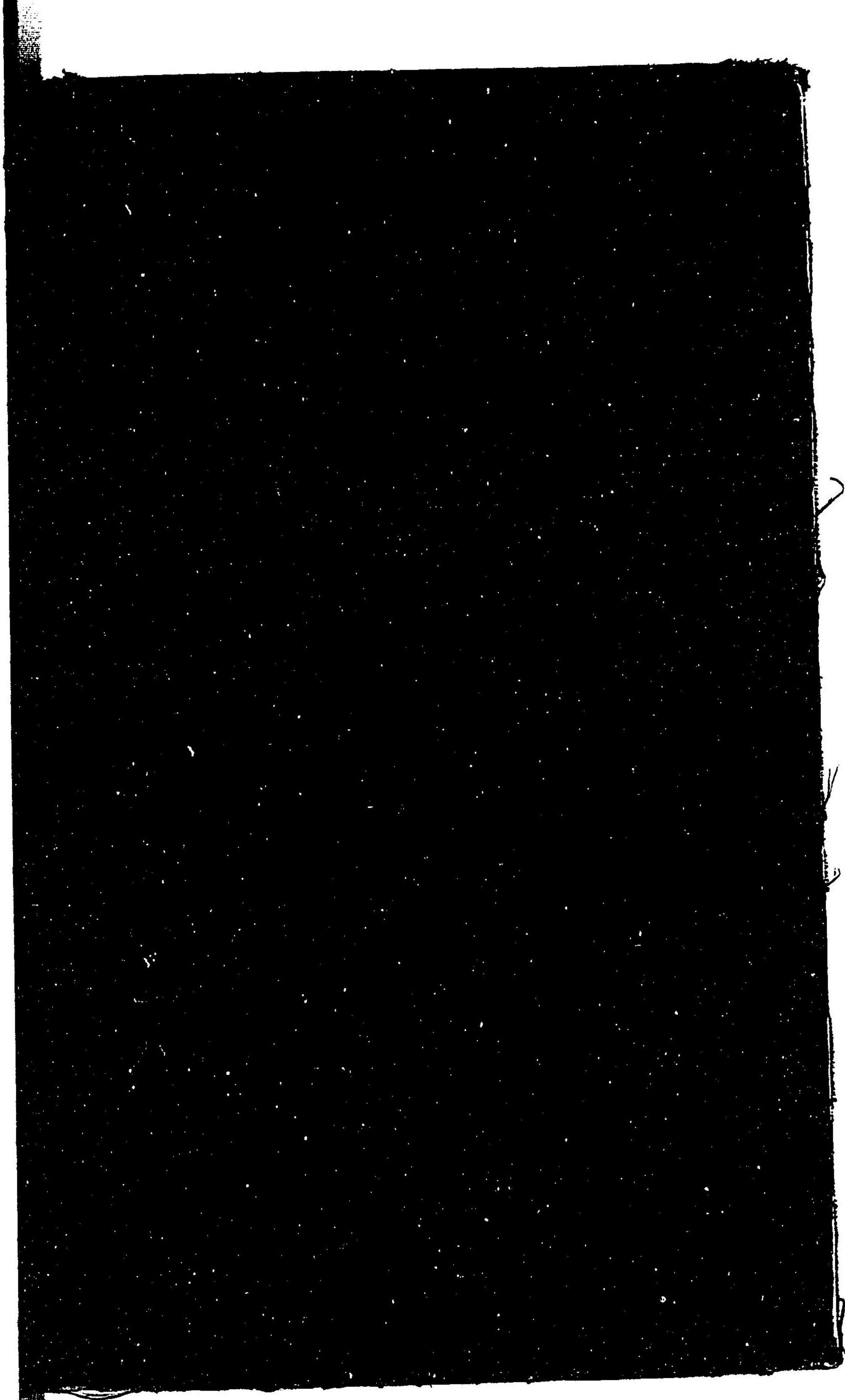


328
265



328  
335







084729-000-4

328-235

児童を謳へる文学

高島 平三郎/編

M43

DBA-0054





